派遣専門家オリエンテーション資料

カーボ・ヴェルデ

REPUBLIC OF CAPE VERDE

任国情報

1 9 9 4 年

JICA
C504
20
IIC
LIBRARY

国際協力事業団
国際協力総合研修所

はしがき

この任国情報は国際協力のために赴任される専門家およびＪＩＣＡ役職員等に、任国での生活上必要な事項についての情報を提供するものです。

本書の刊行にあたっては当該国に派遣中の専門家、プロジェクト調整員、協力隊調整員とその御家族の多大な御協力を得ました。また、外務省、在外公館、その他関係機関の御好意により、貴重な資料の一部を利用させていただきました。

今後も、本書の内容を一層充実させ、常に、新しい情報の提供に努めたいと考えております。

本書が国際協力の分野で活躍される方々の参考となれば幸いです。

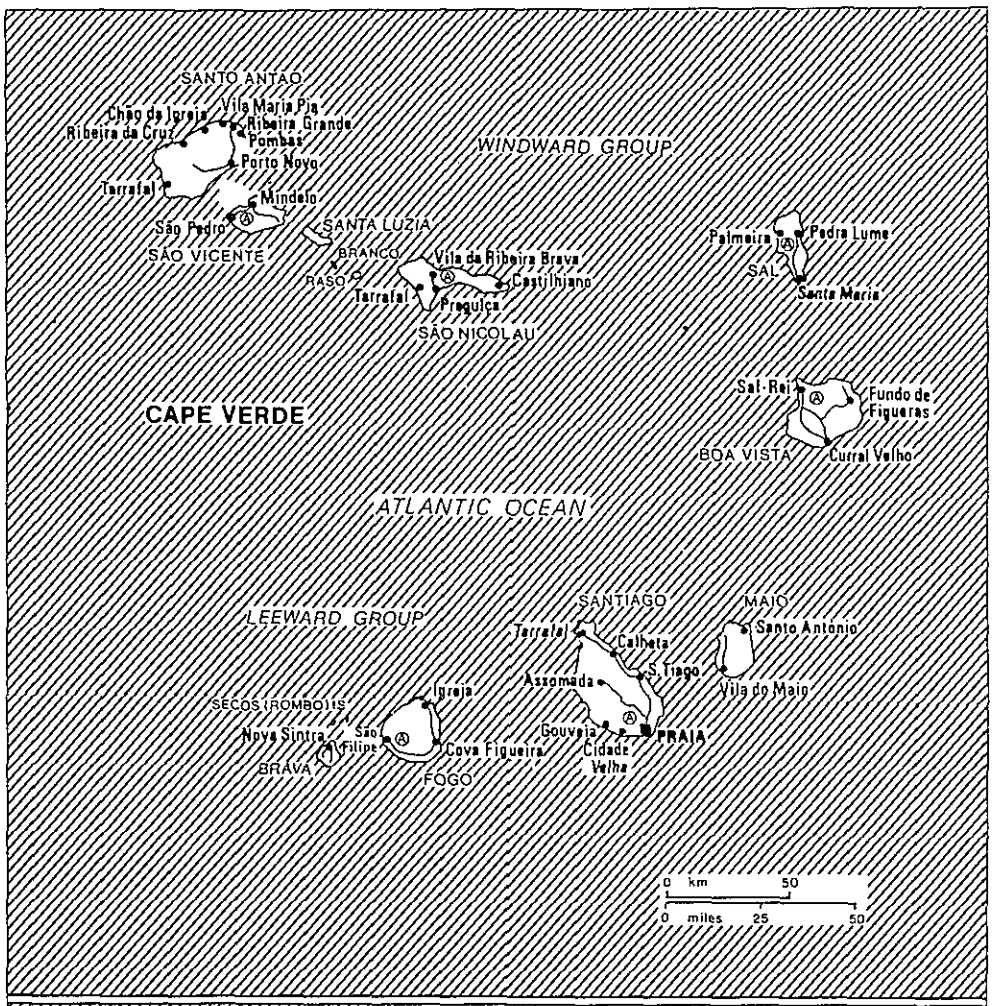
平成 6年 2月

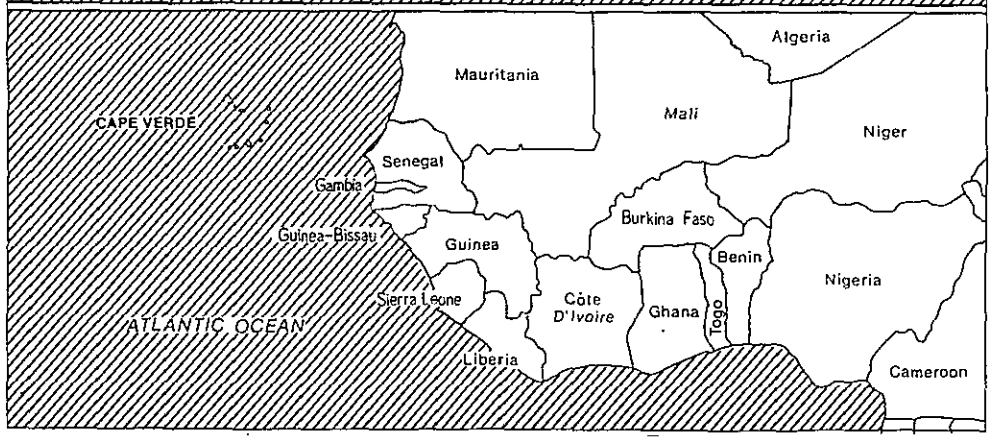
国際協力事業団
国際協力総合研修所長

JICA LIBRARY
1109734[2]

国際協力事業団
25686

カーボ・ヴェルデ


SANTO ANTAO
Chão da Igreja
Vila Maria Pia
Ribeira Grande
Ribeira da Cruz
Pombas
Porto Novo
Tarrafal
Mindelo
São Pedro
SÃO VICENTE
SANTA LUZIA
BRANCO
RASO
Vila da Ribeira Brava
Tarrafal
Castilhjano
Preguiça
SÃO NICOLAU
WINDWARD GROUP
Palmeira
Pedra Lume
SAL
Santa Maria
Sal-Rei
Fundo de Figueras
BOA VISTA
Curral Velho
CAPE VERDE
ATLANTIC OCEAN
LEEWARD GROUP
SANTIAGO
Tarrafal
Calheta
S. Tiago
Assomada
Gouveia
Cidade Velha
PRAIA
MAIO
Santo Antonio
Vila do Maio
SECOS (ROMBO) IS
Nova Sintra
São Filipe
Igreja
Cova Figueira
BRAVA
FOGO
0 km 50
0 miles 25 50


CAPE VERDE
Mauritania
Algeria
Mali
Niger
Senegal
Gambia
Guinea-Bissau
Guinea
Burkina Faso
Benin
Nigeria
Sierra Leone
Côte D'Ivoire
Ghana
Togo
Liberia
Cameroon
ATLANTIC OCEAN

目　　次

Ⅰ　一般事情

1.　主要指標…… 1
2.　略　史…… 3
3.　政治、外交…… 4
4.　経済事情…… 5
5.　我が国との関係…… 8

Ⅱ　生活事情

1.　食生活……11
2.　衣　料……19
3.　住　宅……21
4.　医　療……25
5.　教　育……29
6.　家庭の使用人……31
7.　交通事情……33
8.　通　信……36
9.　マスコミ……37
10.　教養、娯楽、趣味、スポーツ……38
11.　その他のサービス……43
12.　観　光……44
13.　治安、緊急時の心得……46
14.　出入国手続および帰国手続……47
15.　私財の輸送、引き取り、購入……49
16.　社　交……51
17.　任国官公庁……52
18.　在外日本関係機関など……53
19.　地方都市……54

I　一般事情

1.　主要指標

1-1　国　　名　　カーボ・ヴェルデ共和国
Republic of Cape Verde

1-2　独　　立　　1975年 7月 5日（旧宗主国：ポルトガル）

1-3　首　　都　　プライア　Praia
人口　6万人（1990年）

1-4　面　　積　　4,033平方キロメートル（滋賀県と同規模）

1-5　気　　候　　セネガル沖西方 650キロメートルの大西洋上に位置する15の島から成る群島国家である。気候は高温で、5～10月の雨季を除き雨が少なく、大陸から砂嵐が吹き、乾燥している。

表1　プライアの平均気温・降水量表

月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
平均気温(℃)	23.8	25.7	26.9	26.5	25.8	24.0	24.2	24.3	24.7	24.9	24.8	24.5
降水量(ミリ)	4	16	86	107	188	182	222	301	240	183	51	6

1-6　人　　口　　39万人（1992年推定）
人口密度　1平方キロメートル当たり96.7人
人口増加率　2.6%（1980～91年平均）

1-7　人種構成　　大半がポルトガル人とアフリカ人奴隷の混血（元来は無人群島）、ほかに若干の黒人

1-8　言　　語　　ポルトガル語（公用語）

1-9　宗　　教　　大部分がカトリック

1-10 政　　治

(1)　政　体　　共和制

(2)　元　首　　アントニオ・マスカレニャス・モンテイロ大統領(Antonio Mascarenhas Monteiro、1991年 3月就任、任期 5年)

(3)　議　会　　人民議会、79議席

(4)　政　党　　カーボ・ヴェルデ独立アフリカ党（ＰＡＩＣＶ）、民主運動（ＭＰＤ）

1-11 経　　済

(1)　ＧＮＰ　　2億 8,500万ドル（1991年）
1人当たり　750ドル（1991年）

(2) 主要産業　　農業（コーヒー、バナナ、ピーナツ）、漁業（マグロ、エビ）、牧畜業（牛、ヤギ）

(3) 貿　易　　輸出（FOB）　1,000万ドル（1991年推定）
輸入（CIF）　1億ドル（1991年推定）

(4) 財　政　　歳入　29億 2,190万カーボ・ヴェルデ・エスクード（1987年）
歳出　42億 3,860万カーボ・ヴェルデ・エスクード（1987年）

(5) 通　貨　　通貨単位　カーボ・ヴェルデ・エスクード
為替相場　1ドル＝74.004カーボ・ヴェルデ・エスクード（1993年 4月）

(6) 外貨準備高　　7,700万ドル（1990年）

(7) 対外債務　　1億 4,950万ドル（1991年）

1-12 日本との時差

時差は10時間で、日本の正午はカーボ・ヴェルデでは午前 2時である。

1-13 祝 祭 日

1月 1日　新年
1月20日　国民英雄記念日
3月 8日　婦人デー
4月13日　聖金曜日
5月 1日　メーデー
6月 1日　子供の日
7月 5日　独立記念日
9月12日　国家の日
12月24日　クリスマスイブ
12月25日　クリスマス

2. 略　　史

15世紀中頃	ポルトガル船来航（以来、奴隷貿易の中継基地となる）
1963年	ポルトガル海外州となる
1974年12月	ポルトガルとギニア・カーボ・ヴェルデ独立アフリカ党（ＰＡＩＧＣ）から成る暫定政府成立
1975年 7月	独立
1981年 2月	総選挙、ペレイラ大統領再選
同年 2月	ギニア・ビサオとの外交断絶に伴い、唯一政党のＰＡＩＧＣをカーボ・ヴェルデ独立アフリカ党（ＰＡＩＣＶ）に名称変更
1985年12月	総選挙、ペレイラ大統領 3選
1990年 9月	複数政党制導入を承認、単一政党制を規定した憲法 4条を削除
1991年 1月	総選挙、民主運動（ＭＰＤ）が人民議会79議席のうち56議席を占めて圧勝
同年 2月	大統領選、モンテイロが投票総数の約75％を得て大勝

3. 政治、外交

3-1 最近の政情

独立以来、社会主義体制のもと、憲法上単一政党と規定されてきたカーボ・ヴェルデ独立アフリカ党（ＰＡＩＣＶ）による一党政治が続いていたが、1990年 9月複数政党制導入を決定、91年 1月複数政党制のもと、はじめての議会選挙が実施され、新興政党の民主運動（ＭＰＤ）が高い支持率を得て勝利を収めた。同年 2月、独立以来はじめて国民直接投票による大統領選挙が実施され、ＭＰＤ支持のモンテイロ候補が現職のペレイラ大統領を破って選出され、同年 4月、ヴェイガＭＰＤ党首を首相とする新政府が発足した。

きわめて模範的かつ平和裡に行なわれた政権交代は、国際社会からも西アフリカにおける民主主義の成功例として高く評価され、その後も内政は安定しており、民主化は着実に進展している。

3-2 外　交

近隣国との善隣友好、穏健非同盟を基本とする現実路線を堅持している。近年は、経済協力、外国投資誘致の観点から、先進諸国との関係を強化している。また、1991年10月には、国連の安保理非常任理事国（任期92～93年）に選出された。

韓国、北朝鮮と国交を持つ。

4. 経済事情

4-1 概　　観

ＬＬＤＣであり、主要産業は農業・漁業であるが、乾燥したサヘル気候に属し、国土は火山性で起伏の多い土地がほとんどを占めているため、農業生産、飲料水、電力の確保は困難な状況にある。特に農業人口が 8割を占めるにもかかわらず、食糧の自給率は低く外国からの食糧援助に依存せざるを得ない。外貨獲得源は60万人（本国在住人口の約 1.5倍）にのぼる出稼ぎ移民からの送金、海上・航空の交通にかかる中継地収益であるが、慢性的財政赤字を補うにはほど遠い。

1991年からは外国船舶の登録制度を設け、経済の活性化、収入の増大、雇用の促進をはかっている。また、同国は、世銀・ＩＭＦ主導の構造調整計画に頼らず、同国の開発基盤に合致した独自の開発計画（公共部門の縮小、規制緩和、外国投資の促進など）を推進している。

4-2 産　　業

表１　ＧＤＰの産業別構成（時価）
（単位： 100万カーボ・ヴェルデ・エスクード）

	1984年	1989年
農　　業	1,376(12.3)	3,180(14.4)
工　　業	1,925(17.2)	3,773(17.1)
製造業	604(5.4)	1,931(8.8)
サービス	7,908(70.6)	15,109(68.5)
ＧＤＰ	11,209(100.0)	22,062(100.0)

（注）　カッコ内は割合（％）。

主要産業は農業と漁業で、農業がＧＮＰに占める割合は、1984年の 9%から88年は12%に上昇した。しかし、旱魃のためトウモロコシ生産は、89年の 1万6,000トンから90年は半分以下に減少、恒常的な食糧不足状態をかかえている。

工業生産は、水産加工、飲料とタバコの製造、火力発電程度である。

4-3 財　　政

外国からの援助が歳入の60～80%を占め、60万人の出稼ぎ移民からの送金が例年、外貨収入の大半を占めている。最近の政府財政についての詳細なデータはない。

表２　予算（時価）
（単位： 100万カーボ・ヴェルデ・エスクード）

	1978年	1979年	1980年	1981年
収　　入	509	618	874	1,078
直接税	117	124	209	309
間接税	299	349	485	564
その他の収入	93	145	180	205
支　　出	575	657	847	1,053
収　　支	-66	-39	27	25

4-4　貿易、国際収支
(1)　貿　易

表３　貿易額の推移
（単位： 100万カーボ・ヴェルデ・エスクード）

	1984年	1985年	1986年	1987年	1988年	1989年
輸出（FOB）	222	524	355	561	241	527
輸入（CIF）	5,988	7,663	8,601	8,596	8,626	8,706
収　　支	-5,767	-7,139	-8,246	-8,035	-8,385	-8,179

表４　主要貿易品目（1984年）

輸出（100万ドル）		輸入（100万ドル、CIF）	
魚	1.3	食料・家畜	18.7
マグロ缶詰	0.6	工業製品	17.1
原　　塩	0.2	機　　械	14.4

表5　主要貿易相手国　　（単位：%）

輸出	1990年	1991年	輸入	1990年	1991年
アルジェリア	31.3	43.8	ポルトガル	35.5	39.0
ポルトガル	19.1	31.5	オランダ	10.0	8.6
オランダ	0.9	5.6	スペイン	7.3	7.9
イタリア	1.7	3.4	ベルギー、ルクセンブルグ	2.5	4.7

（注）　相手国側からの貿易数値を採用しているので、かなり大きい誤差を含む。

(2)　国際収支

表6　国際収支　　（単位： 100万ドル）

	1988年	1989年	1990年	1991年
商品輸出（FOB）	3.3	6.7	5.6	6.3
商品輸入（FOB）	-101.8	-106.9	-119.5	-123.5
貿易収支	-98.5	-100.1	-113.8	-117.2
サービス輸出	37.8	46.9	51.1	11.9
サービス輸入	-17.4	-24.4	-25.4	-12.7
ＩＰＤの流入	7.2	10.4	11.5	9.2
ＩＰＤの流出	-6.8	-6.0	-7.0	-8.4
純民間移転	39.5	43.2	52.1	45.5
純公的移転	38.7	27.6	25.5	31.4
経常収支	0.5	-2.4	-6.0	-40.5
直接投資	0.4	-0.6	-0.1	1.2
その他の資本	-6.5	2.6	3.8	1.9
資本収支	-6.1	2.0	3.8	3.1
誤差・脱漏	5.7	-19.7	-3.1	28.8
総合収支	0.0	-20.1	-5.3	-8.6

（注）　IPD＝interest, profit and dividends.

5. 我が国との関係

5-1 政治、外交

我が国は1975年 7月11日カーボ・ヴェルデを承認し、在セネガル大使館が兼轄している。カーボ・ヴェルデから我が国への公館は、設置されていない。

5-2 経済、貿易

我が国は、カーボ・ヴェルデから水産物を輸入し（1992年輸入額90万ドル）、同国に自動車などを輸出している。（同輸出額 200万ドル）

表１ 対カーボ・ヴェルデ貿易額の推移

（単位： 1,000ドル）

	1986年	1987年	1988年	1989年
輸　出	931	2,508	4,291	557
輸　入	0	11	0	100

5-3 経済・技術協力

我が国は、カーボ・ヴェルデが市場指向型経済の導入および民主化に向けて努力していること、依然として開発需要の高い群島国家であることなどに鑑み、無償資金協力および技術協力により、食糧援助、食糧増産援助、水産、通信および運輸などの分野に対して協力を行なっている。

表２ 我が国のＯＤＡ実績　（支出純額、単位： 100万ドル）

暦年	贈与			政府貸付		合計
	無償資金協力	技術協力	計	支出総額	支出純額	
88	6.20(98)	0.15(2)	6.35(100)	－	－（－）	6.35(100)
89	0.99(85)	0.16(14)	1.16(100)	－	－（－）	1.16(100)
90	0.26(28)	0.67(72)	0.93(100)	－	－（－）	0.93(100)
91	4.04(82)	0.90(18)	4.94(100)	－	－（－）	4.94(100)
92	8.38(91)	0.78(9)	9.16(100)	－	－（－）	9.16(100)
累計	31.02(89)	3.93(11)	34.97(100)	－	－（－）	34.97(100)

（注） カッコ内は、ＯＤＡ合計に占める各形態の割合（%）。

表3　年度別・形態別実績　　（単位：億円）

年度	有償資金協力	無償資金協力	技術協力
1987年度までの累計	なし	32.18億円 社会福祉事業拡充計画 (78年度：2.00) 沿岸漁業開発計画 (79年度：2.00) 食糧援助 (80年度：2.10) 食糧援助 (81年度：2.60) 既存保健機構強化 (82年度：2.60) 食糧援助 (82年度：2.24) 食糧援助 (83年度：2.23) 食糧援助 (84年度：2.20) 食糧援助 (85年度：2.30) 食糧援助 (85年度：2.00) 海上無線通信網整備計画　(86年度：3.10) 災害緊急援助（旱魃被害）（ＵＮＩＣＥＦ経由）　(86年度：0.48) 零細漁業開発計画 (87年度：4.53) 食糧援助 (87年度：1.80)	2.25億円 研修員受入れ　6人 専門家派遣　3人 調査団派遣　17人 機材供与　22.6百万円
1988年度	なし	1.00億円 食糧援助　(1.00)	0.16億円 研修員受入れ　2人 機材供与　0.3百万円

（以下次ページに続く）

（単位：億円）

年度	有償資金協力	無償資金協力	技術協力
1989年度	なし	1.87億円 食糧増産援助 (1.50) プライア市民文化会館に対する映写・音響機材 (0.37)	0.24億円 研修員受入れ 1人 専門家派遣 1人 調査団派遣 3人 機材供与 2.1百万円
1990年度	なし	5.60億円 地方電話網整備計画 (4.60) 食糧援助 (1.00)	1.62億円 研修員受入れ 5人 専門家派遣 1人 調査団派遣 23人 機材供与 5.2百万円
1991年度	なし	9.80億円 零細漁業開発計画 (6.80) 食糧援助 (1.00) 食糧増産援助 (2.00)	0.83億円 研修員受入れ 1人 調査団派遣 19人 機材供与 5.8百万円
1992年度	なし	8.79億円 島嶼間輸送船供与計画 (7.79) 食糧援助 (1.00)	0.87億円 研修員受入れ 3人 機材供与 10.3百万円
1992年度までの累計	なし	59.24億円	5.98億円 研修員受入れ 18人 専門家派遣 5人 調査団派遣 62人 機材供与 46.2百万円

（注） 1) 「年度」の区分は、予算年度による。
2) 「金額」は、無償資金協力は交換公文ベースに、技術協力はＪＩＣＡ経費実績ベースによる。

Ⅱ　生活事情

1. 食 生 活

1-1 食　　料

(1) 一般事情

ここで述べる状況は、サンチヤゴ島にある首都プライアの状況で、その他の島の都市に比べると条件のよい方である。

すべての物資が不足しているこの国では、食料品もその他の生活必需品と同じく不足している。第 1に、生活必需品である水（雨水、真水）が極度に足りない。

自給できる食料はわずかで、バナナ、パパイア、若干の野菜（ピーマン、豆、メイズなど）、マグロ（キハダ）、カツオ、アジ、ロブスターなどの魚介類、それに牛肉、豚肉、ヤギ肉、鶏肉、鶏卵などがある。また、ビール工場が 1ヵ所サンチヤゴ島に、缶詰工場が 2ヵ所ボアビスタ島、サンニコラウス島にあり、マグロの油漬けをつくっている。

ほとんどの品物は外国に依存している。ビールはプライアでデンマークの技術でつくられている。ビール以外にこの公社（セリス社）では、アグアトニック（キニーネ入りのサイダー）とコーラもつくっている。

全般に食料は不足しがちであるが、何よりもその種類が少ない。米、小麦粉、パン、牛肉、豚肉などは品質に問題はあるが入手できる。しかし、この国で自給している食料品（牛肉、豚肉、魚、バナナなど）以外の食料品は入船の都合で突然品物がなくなることがある。また、祭日の前には卵が売り切れて入手できなくなる。ふだん高価な卵を、祭日に購入する人々が増える結果とみられる。卵は日本の 2倍程度の価格で、現地の人々の感覚では日本の10倍以上になっている。

食料品の輸入先はポルトガルを中心にオランダ、ドイツ、デンマーク、アメリカ、中国などからで、ワイン、アルコール類はポルトガルが中心、バター、チーズはオランダ、粉ミルクはデンマーク、ロングライフ牛乳はドイツからとなっている。いずれも船によるスポット入荷なので、品切れになる場合がある。欲しい品物はみつけた時にすぐ入手することをすすめる。嗜好品では、オイスター油、インスタントラーメンが中国から入ることがある。

野菜類は日本より高価格で、かつ品質はよくない。キャベツ、にんじん、ピーマン、トマト、サラダ菜は自給でき、タマネギ、じゃがいもは輸入している。果物はバナナ、パパイアが 1年を通して入手可能であり、マンゴーは 4～10月まで入手できる。ある時期にナス、スイカ、かぼちゃが、また年に 2度ぐらい長ネギに似たネギが市場に出ることがある。

米は援助米でたいへんまずい。価格は 1キログラム90円と安いが、外米特有のにおいがあり口に合わせるのに相当の努力がいる。

しかし、スパゲティ（イタリア製）が安くて（ 450グラムで 100～ 120円）おいしいので、めん類の好きな人には、こちらをすすめたい。

パンも援助の小麦粉（当地には製粉所がない）でつくられている。1990年頃は触れると崩れてしまうようなひどいものであったが、最近ポルトガルの技術援助によってよくなった。しかし、出ているのはすべて、コッペパンといっている形のものである。食パン型のものもできてきたが、いまだわずかで価格も高く、品質も普通のパン（コッペパン型）より劣っている。このコッペパン型のパンは安く、 1個10～12円である。

アルコール類は自給の砂糖きびからつくるラム酒に似たグローグのほか、輸入のスコッチウイスキー、ポルトガルのワインなどが豊富である。価格はスコッチ類は日本並みである。（ただし、スタンダード品中心でプレミアムはジョニ黒とローガン、オールドパー程度）　ワインは 5リットルで 1,000円ぐらいのものから、 1本 750ミリリットルで 1,200円ぐらいのものまであり、安くて味もよい。特にヴェルデ・ワインというポルトガル北部でつくられるアルコール分の低い、酸味の強いワインは安価でおいしい。しかし、本国に比べると 2倍近くの価格である。

缶詰もたくさん輸入されているが、コンビーフ、ポークソーセージなどはおいしくない。オイルサーディンとポークビーンズの缶詰が口に合うと思われる。

年に 1～ 2度ポルトガルからベーコン、ハム、ブドウ、リンゴ、ミカン、洋ナシなどが入ってくる。入荷後、 1週間ぐらい店頭に出ている。

現地の人はコーヒーを好む。豆はブラジルから輸入している。フオゴ島でもコーヒー豆がつくられているが、不在地主の畑のためまったく手入れされておらず、野生化した木に多くて 1年 800キログラム、雨の少ない最近では 200～ 300キログラムしか収穫できず、なかなか入手できない。このコーヒー豆で入れたコーヒーはとてもおいしいので、フオゴ島へ行った折は入手することをすすめる。

飲料水はポルトガルから輸入しており、 1.5リットルで 100円ぐらいである。年間を通じて入手可能である。

みそ、しょうゆ、のりなど日本食料品の入手は不可能である。しかし、最近、ブラジル産の味の素を販売する店が出てきた。

冷凍・冷蔵を必要とする食料品は、一部の店では冷凍・冷蔵ケースに入っている。しかし、一般に流通の衛生状態が悪い。そのうえ水不足により手、容器、道具の洗浄が不十分なので、食肉の場合、冷蔵ケースから購入し、自宅の冷蔵庫に入れても 3日以内に使用しないと傷んで食べられなくなる。また、食肉の牛、豚、ヤギなどの屠殺前の検疫の有無も定かでないので、料理に使用する場合は現地風に十分以上に加熱した方がよいと思われる。圧力鍋を利用すれば、加熱と同時に硬い肉もやわらかくなるので、圧力鍋の利用をすすめる。

米、小麦粉、じゃがいも、タマネギ、砂糖、粉ミルク、バター、チーズなど輸入品は一般に 1種類のみで、入船ロットが変わるまで同じ品物しか入手できない。場合によっては、何年間も同じ品物しか入手できないこともある。（砂糖、粉ミルク、バター、チーズ）　市内にある 5～ 6軒のストアで普通の食料品は入手できる。野菜や肉を販売している店もあるが、数が少ないので野菜、

果物は市内のマーケットへでかけて購入する必要がある。

市内のマーケットには 100人以上の女性行商人が集まっている。価格は表示されていないので、交渉で決める。そうひどくはないが、外国人とみると多少高くいう場合がある。ストアの場合は価格が表示されており、外国人も現地の人も同じである。

おいしい食料品はポルトガル産ワイン、バナナ、パパイア、マンゴー、ロブスター、フオゴ島のコーヒー豆で入れたコーヒー、それに放し飼いの黒豚と鶏（これは肉は硬いが旨味はとてもよい）である。

ソーセージ、ハム、ベーコンも最近つくられている。

これらの食料品はマンゴー、コーヒー豆を除いて年間を通して入手できる。

(2) 主な食料の出回り状況

米――前述のとおり、輸入援助米でロットごとに品質が異なる。入船の都合でときどき切れることがあるので、気に入った品質の米を多めに買っておいた方がよい。米は現地の人も珍重しているので、品切れになった場合もそれほどの長期にわたらない。（社会的影響が大きくなるので、政府が手を打たざるを得ない）

種類としてはパサパサした細長い米、いわゆる外米が主体で、まれに粒の太い比較的粘りのある品種が入る時もある。

いちおう年間を通して入手できるので、あまり問題はない。

小麦粉――年間を通して入手できるが、輸入する船の都合で切れることもある。米と同様、 1種類のみである。

買いだめした場合に虫のつくことが多いので、注意した方がよい。これは米の場合も同じである。粉の場合は少量なので、防虫対策として常に冷蔵庫に入れて保管するとよい。

パン――市内にパン屋が 2軒あり、一方のパン屋がおいしいという評判であるが、どちらも同じようなものである。品質は、少しずつよくなってきている。種類はコッペパン型が主体である。わずかに食パン型のものを評判のよい方の店でつくっているが、極端に数が少なく、また価格も高い。（ 1斤 160～ 180円） サンドイッチもコッペパン型のパンでつくるので、食パン型はほとんど売られていない。また切れ味のよい包丁の所有者もいないので、購入しても利用できないと思われる。

ホテル、レストランなどでも使用しているパンはコッペパン型のものだけである。現在、菓子パン、フランスパン、クロワッサンなどのパンはまったくどこにもない。しかし、ケーキの台はレストラン、ホテルなどに依頼すればつくってくれる。口コミでつくれる人にあたってつくってもらう場合もあるが、今のところ商品として陳列販売されてはいない。レストランのフラワード・リズではピザをつくってくれる。

肉類――牛肉、豚肉、ヤギ肉、鶏肉などは年間を通して入手できる。牛肉は熟成していないので、肉質がとても硬くて味もよくない。しかも衛生面での管理が悪く、日持ちがしない。

肉類をショーケースに入れて売っているストアが市内に 4軒ほどあるので、肉類はここで購入した方がよい。価格は 1キログラム 1,000円が最高クラスだが、硬くておいしくない。レバー、臓物の類いは、比較的おいしいが、数が少なくて手に入りにくい。また、古くなったものも売られていることがあるので注意が必要である。

豚肉には、養豚と放し飼いにされている黒豚の 2種類がある。黒豚は肉が少なくて多少硬いが、味はよい。養豚はわれわれがよくみかける白い豚で、肉質もあまり変わらない。

鶏はブロイラーが輸入されている。産地はさまざまで、オランダ、ハンガリー、デンマークなどいろいろあるが、個人規模の輸入なので、入荷するとすぐ売り切れてしまう。 1年に 5～ 6回、市内のストアで売られている。入荷後、 1週間ぐらいで売り切れるようである。価格は 1羽 500円ぐらいである。解体したもの、もも、手羽、半身などでは入荷されていない。

地元の放し飼いの鶏は、肉は硬いが美味である。頼めば毛をむしり、処理してくれる。価格は 1羽 600円ぐらいである。

加工肉のソーセージ、ハム、ベーコンは、技術指導の外国人技術者が帰国してから品質が悪くなった。ベーコンだけは利用できるが、その他のハムはまったく問題にならない。肉質が硬くて、切ればバラバラになってしまう。

魚――マグロ、アジが冬の一時期を除いて入手できる。風の強くない夏には、ほかにサワラ、バラクータ、ガローパ（ブダイの類いで、煮つけ、刺し身に適す）が手に入る。

魚は流通過程に問題があり、氷の使用と冷蔵がまったく不十分なので、できる限りマーケットでは購入せず、8:00前に海浜で小舟が砂浜に持ち帰ったばかりの魚を購入することをすすめる。マグロは多少、大量に購入しなければならないが（ 4分の 1割： 5～ 7キログラムで 3,000円程度）、これなら刺し身にしても大丈夫である。

また、タコ、ロブスターなどは潜り漁法で漁師がとり、自分で売り歩くのでマーケットで入手することは困難である。また人気があるので、漁師は必ず売れるレストランやホテルへ持って行って売る習慣にしている。そこで、漁師を紹介してもらって、とったら持ってきてもらい値切らずいつでも購入すると、コンスタントに持ってきてくれる。単身赴任の場合などは、購入したあとでほかにも回すようにしておけばよい。

野菜、果物――野菜は種類が少なく、また数量も少ない。年間を通して常に入手可能なものはない。めったに途切れないものは、キャベツ、タマネギ、ピーマン、じゃがいも、サラダ菜程度である。これらの野菜も少なくなると高価になる。キャベツは通常 1個 300円ぐらいだが、 900円ぐらいになったこともある。現地の人の感覚では 1万円程度になるだろう。トマト、かぼちゃ、長ネギ、大根、カブ、スイカも一時期、購入できる。トマト、ニンニクは比較的よく入手できる。スイカは年に 1度、大根は 2～ 3度みかける。

野菜の種を持ち込んでつくる方法もある。フランス人の医師夫妻がハーブ

類を鉢植えしていたので、小カブ、大根の若芽などは栽培できると思う。ただし、囲いのないところでは放し飼いの動物、鶏、ヤギ、豚などがきて食べてしまうので、要注意である。

卵、乳製品――卵は年間を通じて入手可能となった。価格は日本の 2倍ぐらいするので、現地の人にとって高価である。このため祝祭日の前には日頃購入しない人々も買うので、たいてい品切れになってしまう。行きつけの店に前もって頼んでおく方がよい。

牛乳はロングライフ牛乳が輸入されるようになってきた。価格は 1リットル 200円ぐらいだが、おいしくない。また製造日がたいへん古く、賞味期限があと 2週間といった品物が出回っている。一説にはヨーロッパで 2ヵ月以上もたった売れ残りの品を非常に安く入手して輸入しているといわれている。粉ミルクは 500グラム 1,000円で出回っている。今でも牛乳を買う人は少なく、ほとんどの人が粉ミルクを購入している。

チーズは地元品と輸入品があるが、どちらもおいしくない。輸入品はオランダ産の赤玉とエルダーであるが、流通過程に問題があるのか、仕入れに問題があるのか不明だが、仕方なく食べるという程度である。

地元品はただ固まっただけで未発酵の状態で熟成に至っていないが、衛生面からはこの方がよいようである。ときどきマーケットで入手できるが、食べるには少し勇気がいる。何回か下痢をする覚悟が必要である。その他の島（ブラバ島、ボアビスタ島、フオゴ島）で直接製造している人から購入した場合は、その確率はたいへん少ないようである。

最近、ヨーグルトが出回ってきた。比較的品質もよく、下痢の心配もないようである。

(3) 食料の入手

日本食料品の入手はまったくできない。サンビセンテ島の港に日本の漁船が年に数回、入港するのでその折に偶然出会えたらみそ、しょうゆなどを入手できるかもしれない。しかし、プライアでは日本船の入港はないので無理である。

たいていの日本食料品は、なければないで我慢できるが、刺し身に使うしょうゆは代替がむずかしい。マヨネーズである程度カバーでき、これは入手可能である。

通常の食料は市内の 5～ 6軒のストアと市内にあるマーケット（魚、肉、野菜）で購入できる。しかし、前に述べたように、魚は海浜で朝、肉はショーケースのあるストアで購入し、野菜のみマーケットで購入することをすすめる。営業時間はストアは9:00～12:30と15:00～18:00、マーケットは9:00～15:00なので、買物はどうしても土曜日が中心になる。官公庁は土・日曜日が休日、店舗、ストアは日曜日、祝日が休日で土曜日は午前中のみ開いているので、土曜日の午前中は人々は買物にでかける。

しょうゆなど日本食料品の入手は外国へでかけた折に購入するか（ダカールで中国食料品を）、また日本からくる人に頼んでダカールで購入してもらうようにした方がよい。

1-2　食器・調理器具など

(1)　食器・調理器具などの入手

はしは料理用、食事用、わりばしを含めまったく入手できない。しゃもじ、亀の子タワシも入手不可能である。茶わん、どんぶりに代用できるものは入手することはできるが、非常に困難である。一般に食器、焼き物の類いは少なく、えり好みせずに代用品を選ぶより仕方がない。湯飲みに似た磁器はサンビセンテ島でつくっているので、行った折に購入すればよい。ここでは日本のどんぶりに似たものも入手できる。

フォーク、スプーン、ナイフは安物ではあるが、入手可能である。しかし、お客を招待して食事を出すのを仕事の一部とする場合にはまったく適さないので、持ち込むより方法はない。安物以外は値段が高くなるので現地の人は購入できないし、購入できる層の人々は外国に行く機会が多く、その折に購入して持ち帰っているので自国内で高くなっている食器を買うことはしない。

食器、調理用具などは少なく、入手できるとしても最低の品質のものなので、少しでもよい品物を使いたい場合は持ち込む方がよい。また、電気器具も入手可能といっても、ストアに行って好きな品物を選ぶというのではなく、探し回ってみつけるという感覚なので、えり好みの余地は少ない。

鍋類は購入できる。フライパン、圧力鍋も入手可能だが、安物である。冷蔵庫、冷凍庫、ガスレンジ、オーブンはポルトガル製のものが入手できる。ブラジル製、ポルトガル製の冷蔵庫は電圧の変化に強く、スタビライザー（電圧調整器）の使用なしで日本製の電気器具が全滅した時でも故障せずに動いていた。ミキサーも探せば入手可能である。ガラスコップも入手できる。コーヒーひきもドイツ製のものが市内のストアで購入できる。包丁はブラジル製の切れない安物しか入手できない。

一般に現地の人のうち外国へでかけることができる人々は、機会あるごとに必要品を購入してくる状況で、ほとんどのものは購入できないと考えた方がよい。また、外貨事情で関税が高いことも品物の輸入を少なくしている。

(2)　日本から持参した方がよい食器・調理器具など

料理に使う包丁、砥石は持ち込みをすすめる。できればプラスチック製のまな板も持参するとよい。また包丁は万能の牛刀と、とげるステンレス製の牛刀、小出刃、よく切れるプチナイフ、それにヘンケルの料理バサミもあるとよい。人によって異なるが、中華鍋と圧力鍋、炊飯器（ 220ボルト用）、ふきん（木綿製品が少ない）、おろし金、すりばち、すりこぎ、魚焼き用の金網、点火用のガスライター（入手できるが安物ですぐ駄目になってしまう）を持参するとよい。ガスレンジ、オーブンはブタンガス用で使い勝手はまあまあである。

電圧は 220ボルトだが、突然の停電と電圧の上下が激しくて、テレビ、ビデオ、特に日本製の電気器具は故障してしまうのでスタビライザーが必要となる。現地での購入は不可能である。また、ポルトガル製は安物でよくないので、日本製、フランス製、ドイツ製を持ち込むことをすすめる。

専門家の手荷物の通関は特に目立たぬ限りゆるやかなので、できれば手荷物

での持ち込みがよい。

1-3 外　　食

(1) 飲食店

市内にあるプライアーマル、マリソール、フェリシダーデなどのホテルのレストランで食事（朝は泊まり客のみで、朝食は宿泊料に入っている。昼食は、12:30～14:30、夕食は20:00～23:00頃）、飲み物のサービスを受けられる。飲み物は特に時間帯はない。

マリソールのレストランはきれいで味もよく、サービスもきちんとしている。各国の大使もここを利用する場合が多い。下のコーヒー店ではアイスクリームがおいしい。プライアーマルのレストランは、マリソールより劣る。

フェリシダーデの屋上レストランは悪くなく、価格もほかのホテルのレストランより安い。ホテルの下のコーヒー店ボルカノでは、たいへんおいしいコーヒーが飲める。フオゴ島産の豆を使った蒸気出しの小さなカップで、 1杯50円である。コーヒーの嫌いな人でも、コーヒーのおいしさがわかって好きになるぐらいである。

ほかに市内、郊外に多数の飲食店があるが、探検心で行く店を除けば、フラワード・リズ、アデガー、スーパメルカード・フェリシダーデ、オ・ポエム、中華上海、中華猫熊、ポント（橋）などである。また、サンジョージ（プライアから17キロメートルほど離れた山のなか）にあるレストランはとても気分がよく、山のなかにあるので涼しい。フラワード・リズではピザ、スパゲティも食べられる。その他のレストランはすべてポルトガル料理風で、ステーキ（肉が硬いので、焼く前にメチャクチャにたたいて食べられるようにしている）や魚（アジ、ガローパ、マグロ）の油いため、フライなどが中心である。フラワード・リズは現地の人のレストランで衛生的とはいえないが味は悪くなく、料金も安い。ただし、ロブスター料理は外国人しか食べないので（高いから）、価格は他店と同じぐらいになってしまった。

現地食としてカチューパ（硬いトウモロコシをうすでついて砕いたものに豆数種を加え、魚か肉を一緒に煮込んだ料理）があるが、時間がかかるので用意している店は少ない。（フラワード・リズでは用意している）

現地の人のレストランといっても利用できるのは一部の人なので、特に外国人用のレストランというものはない。なお、レストランは年中無休である。

(2) その他の飲食店

バー、スナックなど飲酒のできる店は、各ブロックごとにある雑貨店が兼営している。一般に物不足の国なので売り手市場である。酒、米、缶詰、石けん、雑貨を扱う店で飲酒ができる。また、ホテルのバー、レストランでも飲酒ができる。

夜になると付近の人が集まって冷蔵庫で冷やしたビール（ 200円）やコーラ、それにグローグ（ 1杯40円）を飲む。日本流でいえば屋台の感じである。衛生的ではないが、楽しい人々と話し合いができる場所である。

大部分の人がカトリックであり、飲酒はどこでもできる。しかし酒にはあま

り強くなく、日本人より弱いぐらいである。

2. 衣　料

2-1 衣　料

(1) 一般事情

平均温度25℃、日照時間年間 3,000時間の国で、常に 4～ 5メートルの風が北北西、北北東（夏と冬）から吹き、雨はほとんど降らない。雨が降りそうな日は湿度が高くなり、夜間でも30℃以上あるので寝苦しい夜となる。こんな日が 1週間ぐらい続く。

日本人は衣服を着て寝るが、外国人はほとんど裸で寝てしまう。冬場（12～2月）は夜間は涼しくて、毛布か薄手の日本の夏掛け布団が必要である。プライアでは室温で22℃が最低、湿度は35％ぐらいになることが多い。まくら、シーツ、毛布、マットレスは入手可能である。洗濯物の乾きはたいへん早い。

冬でも長袖のワイシャツ 1枚で過ごせるが、上着は着用しても暑くないといった程度である。ただし、夜間に戸外のレストランで食事をする場合は風が吹いているので、セーターか上着が必要である。

現地に洋品店はあるが、買いたいものは少なく、現地調達の予定は立てない方がよい。（安物ばかり）　現地の人でも上級の役人は外国（ダカールがもっとも多く、次にポルトガル）で衣服を購入している。また、ズボンをつくってくれる洋服店が 2～ 3軒あるが、あてにしない方がよい。最近、少しずつ衣服の質は向上してきている。

(2) 日本から持参した方がよい衣料

必要な衣料はすべて持参した方がよい。特に綿の下着類は入手困難である。また履物、靴下も同様である。外国人で現地で入手した衣服を家のなかで着ている人もいるが、趣味の程度である。ここはアフリカの田舎だからといって、現地風に生活している外国人もいる。

(3) 任国で調達した方がよい衣料

作業用ジャンパー、ズボンである。

(4) その他の留意点

木綿のよい下着、ズボンはない。ジーンズも同様である。布類も持参した方が快適な日常生活が送れる。

コート、レインコートはいらない。帽子を着用する人は、気に入ったものが入手できないので持参した方がよい。

毛布、シーツ、衣服の類いを購入した場合は、使用前に太陽によくさらして、付着しているかもしれない虫（ダニ類）を除いておく必要がある。

2-2 礼　装

(1) パーティ

ネクタイ着用のパーティは年に 2回程度で、黒っぽい背広で問題ない。

普通のパーティは、男性は半袖シャツまたはワイシャツでノータイ、女性はこざっぱりした服装で十分である。

(2) 式　典

礼服に関しては、アメリカ、フランスなどの大使はモーニングなどを持参し

ているが、一般には黒っぽい背広で十分である。最近この国の大臣も良質の背広を着るようになったが、いまだ衣服に関しては厳格ではなく、適当な服装をしている。女性は落ち着いた服装で十分である。

(3) その他の冠婚葬祭

(4) その他の留意点

2-3 洗濯、仕立て、修繕、保管

(1) 洗　濯

ドライクリーニング店を含め、洗濯業はない。アイロンはポルトガル製の安物が手に入るが、スチームアイロンはない。

電気洗濯機も入手可能だが、メイドを雇っている人は必要としない。洗剤は入手できるが、柔化剤はないので食酢で代用することもできる。また、水が極度に不足しているので、色落ちしやすいものは避ける方がよい。

家にはポルトガル製のコンクリートでつくった大きな洗濯槽があり、水槽と洗濯板がひとつになっているので、これを利用している。日本の昔のたらいと洗濯板をひとつにして大きくしたようなもので、立ち姿勢でゴシゴシ洗うので汚れはたいへんよく落ちるが、布の傷みは激しい。前任者のいた家（新築以外）では設置されているが、ない場合は購入し、自分でトラックを雇って運んでもらう必要がある。重量は50キログラム以上あり、重い。

(2) 仕立て、修繕

背広、スーツなどの仕立てはできない。ズボン、スカートの仕立て程度はできる。

現地で衣服をつくろうという計画は立てない方がよい。現地の人でもポルトガル、ダカールでつくっている。

(3) 保　管

乾燥した気候で夏の終わりに少し湿気がある程度なので、あまりかびなどに注意を払う必要はない。

しかし、細かい砂ぼこりが家中に侵入してくるので、衣服につかないようカバーで覆う必要がある。普段着は問題ないが、羊毛の衣服は注意を要する。また、衣服に限らずすべてのものが砂にまみれてしまうので、防塵対策が必要となる。ポルトガル製の電気掃除機が出回ることがあるので、購入して砂ぼこりを取り除いてもよい。

3. 住　　宅

3-1 住宅事情

(1) 一般事情

外国人に合う住宅、ホテルは少ない。外国人向け住宅は現在、少しずつ増えてきているが、いまだ不十分である。水は増えていないので、水の確保が重要となる。

この国の人は外国に出稼ぎに行って少しお金がたまると外国人向けの家をつくり、その高い家賃で建て増しをしていく習慣がある。まず3LDKぐらいの間取りのものが 4つ入るぐらいの建物をつくり、そのうちのひとつをなんとか人の住めるようにして家賃をとり、その家賃で隣の部分をつくり、また外国人に貸して家賃収入を得るという方法で建物を完成させ、その後は家賃を蓄え商売を拡大する方向へ持って行く。 1,000万円以下の金額で建てても月額10万円以上の家賃がとれるので、お金のある人にはよい商売である。

赴任当初はマリソールかフェリシダーデ、ソルマールがよいだろう。これらのホテルは部屋数が少なく満員の場合が多いので、予約を入れるか、入室したら何日までと期日をいった方がよい。外国の観光客や大臣が集まってくる場合は、まずプライアーマル、マリソールの順で入る。その影響でほかのホテルが満員になることがある。

プライアーマルとマリソールの部屋にはエアコンがついており、また冷蔵庫のある部屋もあるので、できれば冷蔵庫のある部屋を確保することをすすめる。

地方にもホテルやペンション（各部屋にトイレ、シャワーのあるところと共同のところがある）があるので、なんとか泊まれる。また、シーツ類があるので、寝袋を持参する必要はないだろう。ただし、赴任当初、新築の部屋に入る場合は家具類は一切ないので、寝袋は役に立つと思う。

前任者がいる場合でもカーテン、家具類は早めに交渉して確保しておいた方がよい。のんびりしているとまったく何もない部屋で改めて自分で一切のものを探して手に入れなければならなくなる。なぜなら、引っ越しとわかるといろいろな人がきて、気に入った家具、道具をみて買いとりの約束をしてしまうからである。

最近、家具をつくる工場ができたのでつくってもらうこともよいが、木材の乾燥が悪いので必ず歪みが出てしまう。扇風機は台湾製のものが入手できるが、価格は日本の 2倍以上する。

(2) ホテル事情

外国人が利用するホテルは、次のとおりである。

表1　ホテル一覧
（単位：カーボ・ヴェルデ・エスクード）

	部屋数	料金
プライアーマル	約50	約 5,500
マリソール	約35	約 5,000
フェリシダーデ	約20	約 4,000
ソルマール	約25	3,000

（注）　プライアーマルの料金は、日本円では約 1万1,000円である。

プライアにある最高級ホテルはプライアーマル（ 3つ星程度）で、市の中心から 2キロメートルほど離れた海の近くにある。プール、テニスコートがある。電話は室内にあるが、外へはかけられない。フロントを通して市内、島外へかける。部屋にはバスタブがあり、お湯が出る。ほかのホテルはバスタブがなく、シャワーだけのところがほとんどである。マリソールには一部バスがついた部屋がある。この国ではたいていのホテル、宿は水のシャワーだけであり、お湯の出るホテルは第 1級のホテルとされている。

フェリシダーデは市内にあり、足回りが非常によい。食堂、店舗も近く、各官庁も近いのでたいへん便利がよい。マリソールも市の中心から歩いて15分ぐらいのところにあり、食事がおいしい。しかし、道路に面していて夜は少し騒がしい。また、ソルマールも市内の中心にあり足回りはよいが、食堂がない。しかし近くにレストランがあるので、不自由はしない。プライアーマルは海の近くで静かで眺めもよいが、車で行かないと不便である。

ほかにも宿泊施設はあるが、ヨーロッパ人、日本人が利用するには問題がある。リュックを担いだ冒険旅行者は利用している。

観光地として知られるボアビスタ島、フオゴ島にもホテルはあるが、シャワーは水だけで夜には電気が止まる。国際空港のあるサル島（ここだけはジェット機が発着できる）とプライアが首都となる前に首都であったサンビセンテ島のミンデレオには、きちんとしたホテルがある。

(3)　住宅の探し方

外国人が住める住宅は、いまだ少ない。住宅あっせん業者などがいない国なので、口コミや知人の紹介、外国人の多く集まる国際機関の掲示板を頼りにする。しかし、はじめて訪れた場合、知人、友人もなく、事情もよくわからないところで家を探すことはむずかしい。まずホテルに入り、帰国する外国人の有無を確かめて、その家を訪れて気に入れば借りる方法がよいだろう。住んでいる人に使用勝手をいろいろ聞いておくことは大切である。

一般に外国人向け住宅の家賃は高い（現地の人の 2万～ 3万円程度に対し、

8万～12万円）ので、外国人が住んでいた家をその後、現地の人に貸すケースは少ない。（貸しても外国人並みの家賃はとれないので）　この国では外国人向け価格はほとんどないが、家賃だけは異なるようである。

(4)　住宅の選定上の留意点

まず安全と水の確保が第 1である。水は 1週間に 2～ 3度、しかも朝の早い時間（6:00～7:00）の 1時間のみ供給される。このため、外国人向けの家には通常、地下に貯水タンク（ 150～ 200リットル）、屋上に同様のタンクがある。地下タンクだけの家もある。水道の蛇口を開くと連動して揚水ポンプが働き水が出るので、いちおうよいようにみえるが、ポルトガル製のポンプは故障が多く修理する人も少ないので（自分で修理しなければならない）、この形式の家はすすめられない。地下タンクの水を揚水ポンプで屋上に揚げて、自然落下で使う形式をすすめたい。家の配水管には注意が必要である。新築の場合は、必ず問題が起こる。トイレの水が流れない、床にもれてくる、台所の配管の継ぎ目からもれてしまう、帰宅したら床が水浸しになっていたなど、トラブルは多い。前任者がいる場合は、この点をよく聞いておく方がよい。入居前に修理すべきところはきちんと修理することが必要である。

コソ泥の類いが非常に多いので、外部から侵入できない家、外門に鍵がかかり、内部も各部屋ごとに鍵がかかり、窓には鉄柵がしっかりと埋め込まれ、扉も丈夫なもので 2ヵ所以上鍵がかかるもの、それに扉のあるガレージのついた家が望ましい。次善のものは、門のなかに車を入れ外門の鍵がかかるものである。

そのほか、風による砂ぼこりが多くて家のなかが砂だらけになるので、風上に広場などがないこと。

雨は少ないので水の被害は少ないが、年に 1度ぐらい大雨が降ることがある。この際、丘の途中から土砂が崩れてくることがあるので、この点は注意する必要がある。

電話は少なく、ついている家、アパートはまずないが、あれば便利である。最後に、オーナーの人柄が大切なのはいうまでもない。

(5)　住宅の契約

口頭でも十分であるが、文書でかわした方がよい。（特別な場合以外、契約書をかわすことはしない）　期間はいちおう 1年間で、支払いは 1ヵ月前払いが通例である。 2ヵ月前払い、 6ヵ月前払いというケースもあるが、これは異例である。

家賃は届ける場合と、とりにくる場合があり、最初に約束する。銀行振込みはできない。この国の銀行はまったくサービスが悪く、サービス以前の仕事もあてにならないので、できる限り利用しない方がよい。トラブル発生で時間をとられるだけである。

家賃は3LDKのアパートで 9万～10万円、一戸建てで12万～17万円程度である。出居時に室内のペンキ、床の塗料代の負担をするのがふつうである。

(6) 電気、ガス、水道などの手続と管理

公共料金（電話、電気、水道）は、各人がおのおのの支払い場所へ出向いて支払う。行列ができることもある。支払いが遅れると電話は 1ヵ月、水道、電気は 3ヵ月で止められてしまう。

電話、電気、水道はおのおのの事務所へ出向いて申請して契約する。ただし、電話は申請してもなかなか引けない。通常、 6～12ヵ月の期間が必要となる。料金は電気、水道も多く使用するほど、単位当たりの価格は高くなる。

ゴミ処理は、家の近くの角地にオランダ製の大きなプラスチックのゴミ箱があり、そこに捨てる。ゴミは毎日回収しにくる。しかし、ゴミ箱の付近、特に外国人住宅の場合は子供達が探してかき回すので、汚れてゴミが散乱している。

し尿に関しては、外国人住宅はすべて水洗トイレとなっており問題はない。また、詰まることもめったにない。下水は地下に流して土地に吸い込ませる方法で、下水処理場はない。

(7) その他

水不足なのに蚊がいる。日本の蚊と少し異なって羽音が弱く、足など耳に遠いところを刺す。跡が残りひどくなるので、蚊取線香の類いを持参した方がよい。現地では入手できない。そのほか、マラリアは比較的少ないがときどき発生しているので、用心のためバルサンなどを持参するようにした方がよい。エアゾール式の殺虫剤は容易に入手できる。

車のバックミラー、スペアタイヤの類いの盗難が非常に多い。この対策にガードマンを雇う必要がある。 1人では高くつくが、共同で雇って一定のところへ車を集めて見張る方法があるので、これを利用すると便利である。

4. 医　療

4-1 赴任前の準備

(1) 予防接種

入国に際し、法的に義務づけられた予防接種はない。しかし、隣国のセネガルへ入る必要が出てくるので、セネガルで必要な黄熱病の予防接種をすることが必要である。そのほか、自衛上、A型肝炎、B型肝炎、破傷風の予防接種は必要であろう。

なお、やむを得ない場合を除いて、小児を同行することはやめた方がよい。

(2) その他の準備

赴任前には健康診断を受け、尿検査、肝機能を含めた血液検査、ツベルクリン反応、A型肝炎、B型肝炎の抗体の有無などを調べておく必要がある。また、目と歯に関しては、できる限り処置して予防と対策を立てておく必要がある。歯科医も眼科医もいないので、特に注意してほしい。

歯ブラシと歯みがき粉については、特に愛用のものを 1年間分ほど持参した方がよい。目に関しては、眼鏡の必要な人は必ずスペアを持参する。コンタクトも同様であるが、砂ぼこりが多くコンタクトが使えない場合が多いので、要注意である。目薬も必要である。

疾病に関しては特に注意が必要で、日本で使用している薬は必ず予備も含め持参する。目薬、かぜ薬、抗生物質（服用、外用）、胃腸薬、正露丸、傷薬、虫刺され用、バンドエイド、ビタミン剤、尿検査紙などが必要である。特に日本にいる時にまったく使わなかった胃腸薬、かぜ薬が必要となる場合が多い。

体温計、温度計も入手できないので持参した方がよい。そのほか、血圧測定器、注射器（使い捨て）も持参したい。

4-2 医療事情

(1) 医療機関

プライアに病院はあるが、医師が不足しているし、設備も不十分である。何よりも水不足による衛生面での不安が大きい。水が週に 2～ 3度供給されるという状態では、まず利用をすすめられない。特に外科手術はまちがっても受けないようにとの外国人からの助言もあるくらいである。もちろん耳鼻科、歯科、眼科などの専門医はいない。（フランス人の小児科医が兼務していた）　病気の場合はフランス、ポルトガルへ行く必要がある。

フランス、ドイツなどから医師がきている場合があるので、できる限りそれらの人々と親しくなっておくことも必要である。現地の人も外国人医師に頼るし、国外へでかけて治療するケースが多い。

(2) 緊急時の対応と措置

現在、この国には日本人は 2人いる。（専門家、元専門家各 1人）　2人ともサンビセンテ島に在住しており、サンチヤゴ島にはいない。緊急時の対応は各自で策を立てないといけない。

いざという場合に備えて友人をつくっておく必要がある。旧ポルトガル領なので情報量の多いポルトガル人、フランス人、アメリカ人などに相談できる友

人があればよい。

何か起きそうな場合にポルトガル、フランスへ脱出できるようにしておくこと。病気の場合、リスボンの〇〇病院、あるいはフランスの〇〇病院へといった具合に準備しておくことが必要であろう。政変や内乱を感じて脱出する場合も同様で、ポルトガル人、フランス人など情報量の多い、言葉の通用する人々の間に友人をつくっておく必要がある。

4-3　医薬品など

(1)　携行することが望ましい医薬品

現地で調達できる医薬品は何もないと考えた方がよい。前述のように日常利用している医薬品、体温計に至るまで持参すべきである。ばんそうこう、トローチの類いも役に立つ。

(2)　任国で調達できる医薬品

けがをした人が傷口に布、紙をあててガムテープでとめているようすをみたら、この国で何か調達しようと思う気持ちはなくなる。何もない。なお、薬局は日曜日、祝祭日でも当番制でひとつの町で 1軒は必ず開店している。

(3)　任国で調達できる衛生用品

紙おむつ、生理用品は入手可能である。包帯、ガーゼ、ばんそうこうの入手は困難である。

(4)　医薬品を使用する場合の留意点

極力使用しない方がよい。（日本から持参すべき）　どうしても使用する場合は、前述のフランス人医師、ドイツ人医師などの指示で使用した方がよい。

4-4　妊娠、出産、育児

(1)　妊娠した場合の対応

最近、ドイツ人医師がきたので現地で出産するというドイツ人女性がいたが、異常分娩の場合は対処が無理なので、現地で出産する外国人女性はいないようである。

(2)　出産後の対応

(3)　育　児

粉ミルク、ベビーパウダー、哺乳瓶、幼児用シャンプーなどの購入はできる。しかし、外国人は自国のものを持参している。

日本人で幼児を連れてきた家族も、日本から紙おむつなどを送ってもらって日本製を使用していた。

4-5　手　　術

(1)　任国で可能な手術

まちがっても外科手術は受けないようにという助言（外国人専門家から）どおりだと思っている。

(2)　手術設備の状況

水が不足し、給水が週 2～ 3回、各 1時間という状況で、ためた水で消毒、洗浄を行なっている。

(3)　その他の留意点

4-6　任国でよくかかる傷病

(1)　一般の疾病

蚊に刺されて起こる皮膚病がある。なぜか刺されたあとがかゆく、ひどくなる。虫刺されのかゆみ止めを持参するとよい。

砂ぼこりが多く眼病が起こりやすいが、手で目の周りをこすらない習慣をつければ防げる。目薬を持参した方がよい。はだしで歩く人のなかには、足が象のように太い人がいる。寄生虫によるものだと聞くが、はだしで歩かない人には問題は起こらない。

このほかに、かぜが流行している。いつも誰かがひいている。日本からかぜ薬をたくさん持参した方がよい。現地の人にはじめからかぜ薬を与えると常にあてにされるので、注意が肝要である。

(2)　風土病・伝染病

目立つのは皮膚病、象の足のように太くなる寄生虫の侵入による病気である。ときどきマラリア、破傷風の話も聞く。

(3)　有害動物、病害虫

蚊（刺されるとかゆく、跡が残る。マラリアの蚊も）、ムカデ、サソリがいる。サソリは 5センチぐらいで砂漠に住む毒のあるものが家のなかに入ってくることもある。しかし、サソリもムカデもめったにはみない。毒ヘビの類いはいないようである。

ほかにダニもいるが、これは消毒し、清潔にしていれば問題ない。

4-7　保健衛生

(1)　飲料水

一般に利用している水はわき水で、特に消毒などの処置はしていない。わき水は良質でカルシウムが若干多い程度で、塩素やアンモニア、鉄、マンガンなどの金属の含有は少ない。この水を水道管で毎週 2～ 3回、早朝に 1時間ぐらい供給する。現地の人はそのまま飲料用にしているが、外国人はポルトガルや外国のミネラルウォーターを飲用している。

その他の島では海水を濾過して水道水にしているところがあり、水不足は深刻である。

(2)　濾過器の入手法

入手できないし、入手の必要もない。水道水はタンクにためて洗濯、シャワーに使用できる。

(3)　その他の留意点

まったく乾燥している国なのでじめじめした非衛生的な面は少ないが、帰宅後は必ず手洗いとうがいをする習慣をつけるとよい。

人々の多くが手足に古傷のある場合が多いが、水不足による衛生面での処置が不完全なため化膿して古傷になるとみられる。皮膚病も多い。赴任する場合は傷口につけるペニシリン軟こうの類い、ばんそうこうを忘れずに持参する必要がある。

現地では手を洗う習慣のない人が多い。

野菜が不足しているので、極力みつけて食事のバランスをとるように心がける。魚は生で食べるとビタミン、酵素が豊富にとれるので、できるだけ朝、海岸へ行き購入するようにするとよい。

道路や海浜には瓶の破片があるので、足を傷つけないように気をつけたい。また、衛生状態が悪いのか、食物のせいか下痢症状が多くなる。トイレが制限されているので（水が出ないので、自宅か行きつけのホテルのトイレしか利用できない）、気をつけてほしい。病院がないために町にはときどき精神病の人がいるので、注意が必要である。

5. 教　育

5-1 教育事情

(1) 一般事情

日本でいう小学校、中学校、高校があり、制度はポルトガルのものと同一で、6年、3年、3年となっている。高校はプライア（サンチヤゴ島）とミンデレオ（サンビセンテ島）にある。大学はない。成績のよい生徒は高校卒業後、政府の奨励金を得て外国へ留学できる。

校舎が不足しており、小・中学校は午前、午後の部に、高校は午前、午後、夜間の部に分けて教室の不足を補っている。

教育水準は低く、教師の質に問題があるといわれている。社会主義国の名残りで、教育には費用はかからない。非識字率は70%（成人）といわれているが、政府は教育に力を入れているのでだんだん少なくなっていくと思われる。

外国人で子弟を伴っている場合は非常にまれで、彼らとて中学生程度になれば母国へ戻っている。

(2) 日本人学校

ない。

(3) 現地校、外国人学校

プライアに小学校は数校、ほかの町、集落にもそれぞれ歩いて行ける範囲に存在する。外国人学校はない。

(4) 幼稚園

日本に比べて規模が小さい。個人経営で園児も20人以下、先生も 2人程度で、ちょっとみた程度では幼稚園とはわからない個人の住居のようなところである。幼稚園というより、託児所という感じである。

5-2 入学手続および授業料

(1) 日本人学校

(2) 現地校、外国人学校

(3) 幼稚園

5-3 教育関係施設

(1) 図書館

国としての施設は何もない。

市内にフランス文化センターがあり、フランス語の図書やビデオを多少保有している。希望により貸し出してくれる。ビデオは有料で、1週間 200円程度である。また、アメリカ大使館でもビデオを貸してくれる。

(2) スポーツ施設

スポーツクラブがひとつあり、テニスコート 2面と 9ホールのゴルフ場をひとつ所有している。テニスコートはコンクリートに塗装したコートであり、ゴルフ場は小石だらけの砂漠で、クラブ、アイアンヘッドがメチャクチャになることを覚悟して行なう必要がある。日中は暑くて、木陰も日陰もないのでプレーは疲れる。テニスは少し無理である。早朝、夕方のテニスは比較的気持ちがよい。

会費は 1年 5,000円程度である。テニスコートは 1面 1時間 300円、ボールボーイが 1人 100円で 2人、ゴルフは 1人 300円、キャディーの子供は 3人で 1人 200円、 1人は車の見張りにおく必要がある。

ほかにペタンガ（フランス人が好む鉄球投げ遊び）ができる。しかし用具がまったくないので、テニスのラケット、ボール、ゴルフのクラブ、アイアン、ボールなどすべて持ち込まないと遊べない。当地での入手はできない。帰国する外国人から譲り受ける方法しかないので、あてにならない。

また、体育館があり、室内でバスケットボール、卓球ができる。プライアーマルにはテニスコート 2面と海水プールがあり、宿泊者は利用できる。

サーフィン、ウィンドサーフィンの海員クラブもあるが、用具は個人持ちなので、用具がなくて利用したい場合は持ち主と交渉して借りるか、譲ってもらうしかない。この場合の金額はわからないが、一般に中古品でも新品と同程度の価格を支払う場合が多い。

5-4 家庭学習

(1) 家庭教師

ポルトガル語、フランス語、英語などの語学の個人教授を受けることは可能であるが、ネイティブに頼むことが必要である。アフリカで生まれ育ったフランス人、イギリス人などの場合、アフリカなまりが強いので注意が必要である。

語学以外の個人教授を探すことは困難である。

(2) 通信教育

特にない。

(3) 携行した方がよい家庭用学習教材

こちらで入手できるものは何もないので、必要な教材はすべて持参する。ノート、筆記用具は特にえり好みはできないが、入手可能である。しかし、筆記用具などは自分の気に入ったものを、またワープロ、ファックスも持参することをすすめたい。虫眼鏡も、使う人は持参する必要がある。

6. 家庭の使用人

6-1 一般事情

紹介所などのあっせん機関はなく、知人の紹介で雇っている。

一般に単身者の場合（ほとんどの外国人があてはまる）は、メイドとガードマン、家族の場合はメイド、ガードマンに料理人を加えている。彼らは外国人の家に雇われると、子供、兄弟などを伴って食事をさせる場合があり、雇い主の分のほかに自分と自分の家族の分をつくるので、安い賃金で働いているようである。メイドの賃金は 6,000～ 7,000カーボ・ヴェルデ・エスクード（ 1万 2,000～ 1万4,000円）、料理人が 1万 4,000円程度、ガードマンが 2万 5,000円、運転手が 3万 5,000～ 6万円程度となっている。

料理はできる限り自分で行ない、買物も自分ですます方が物価や品物の有無、品切れなどもわかるし、衛生面でもよいと思われる。

6-2 運 転 手

(1) 雇　用

雇用方法は、知人の紹介がいちばんである。自分でみつけた人もいたが、これはたまたまレンタカーで雇った運転手がよかったので交渉して雇ったというもので例外である。（ 1ヵ月 7万円支払っていた） 通常は、紹介者より身上を聞いて雇用する。この場合は性格、家庭状況、運転技術も含めほとんどのことがわかる。金額を決める場合もきちんと話し合いができ、条件も紹介者の立会いで決められるので都合がよい。

しかし、交通はそれほどの混雑はなく運転しやすいので、運転手を雇わない外国人も多い。

(2) 日常管理

車を運転手に預けると私用に使うケースがあるので、極力持ち帰らせないようにすること。自宅か、自宅に車庫がない場合は近くの安全な場所において、自分でもすぐ使えるようにしておく必要がある。

(3) 教育指導

この国の人々はプライドが高いので、この点を考慮して接した方が好結果を生む。ほめすぎると甘えが増えることが多いので、この点は注意した方がよい。

よい場合はメイド、料理人も同様だが、推薦状を書いてほかの人に紹介してあげるようにすると、使用人の励みにもなる。

(4) その他の留意点

相手の身になって相談にのってあげる必要がある。しかし、前述のようにどうしても甘えが増えてきて、子供の具合が悪いので薬を、ほしいものがあるので前借りをといったようになるので、それが当然のことになってしまわないように注意することが肝要である。

6-3 メイド／サーバント

(1) 仕事の種類と人数

一般にメイドが洗濯、掃除、料理、また子守なども行なうが、料理人を別におく家もある。単身者はメイド 1人、家族はメイドと料理人をおく場合が多い。

現地の人の場合はメイドに子守をさせることが多いが、外国人の場合はメイドに子供を預けることはまずない。子供は母親が世話をする。

(2) 雇　用

運転手の場合と同様、知人の紹介によるものがよい。前の雇い主の推薦があればまず大丈夫だろう。ものを盗まないことが第一条件で、この点の確認をまずすることが必要である。

(3) 日常管理

メイドは家のなかで働くので作業服を与えた方がよい。シャワーもメイド用のものが別にあるので、使用させるようにするとよい。

子供を連れてくる場合が多い。食事は昼食、夕食をつくりメイドも子供も食べる場合が多い。（別時間、別場所で夕食を食べる場合は少ない）　子供がこない場合でも、残りものを持ち帰るケースが多い。また、これをあて込んで材料を購入したりして食事をつくるのが一般的である。

6-4　庭師、ガードマンなどの雇用

(1) 雇　用

運転手、メイドと同様の方法で雇用する。

ガードマンについてはガードマン会社ができたが、24時間態勢で盗難に対し責任を持つという名目で費用は高く、月額二十数万円とのことで専門家個人で支払える金額ではない。通常は 3万～ 4万円程度となっている。

7. 交通事情

7-1 交通手段

(1) 一般事情

島内はタクシー、プライア市内はバスといっても路線は 5キロメートル程度しかないが、これらを利用できる。

タクシーはベンツ、プジョー、カローラなどドイツ、フランス、日本の車が多い。バスもベンツ、ボルボである。車体の傷はもとより、サイドミラー、方向指示器、ライトなどの破損が目立つ車が多い。

タクシーにはメーターはついていないが料金はいちおう地区別に定まっているので、調べておいて乗る前に交渉する必要がある。タクシーを早朝利用する場合は、前日に交渉し自宅まで迎えにきてもらうことが可能である。タクシーは22:00 頃まで市内のタクシー場に集まっている。最近、台数も増加し40台程度になり、不足することはなくなった。

町と町（最長70キロメートルほど）を結ぶ交通手段としては、アルガールという小型のバスがある。これはトヨタ、ニッサンの 100キロ積みトラックを改造し荷台に幌をかけて、人と荷物をたくさん積めるようにしたものである。人を20人と幌の上に荷物を乗せて走ることもある。ほかに日本製のボックスカーがあるが、 9人乗り程度のところに20人ぐらい乗せ、屋根には荷物をたくさん乗せて走っている。料金は地区の距離により異なるが、 140～ 500円ぐらいの間でいちおう定まっている。プライアの中央部にあるマーケット付近に常に20台ほど集まっていて、日本からきた荷物を空港や港から自宅まで運ぶ時に交渉して利用できる。料金は市内でも 1回 1,000円程度は必要である。大きな荷物を運ぶ場合は荷物運搬人（助手）が必要で、 1回 1人 300～ 400円かかる。外国人だと高くいう場合が多いので、相場を調べておいてから交渉する方がよい。しかし、アルガールは行商人が中心で、外国人が乗るにはちょっと問題がある。

長期滞在者は車が必需品となっているので、外国人で車を持っていない人はいない。車がないと緊急時はもとより、日常生活の買物、外出時の安全も含めてたいへん不便であり、専門家としての活動もむずかしい。

しかし、車も部品も極端に少なく、不足しているので、タイヤの摩耗もひどくすぐパンクする。ほとんどの車のタイヤはチューブ入りである。オイル交換は市内の 2ヵ所で可能である。また、修理もある程度できる。

主要道路は石畳であるが、急坂が多く、市外部は砂、小石の道なので四輪駆動車が便利である。それに大勢の人、荷物を乗せる場合が多いので、高馬力のエンジンの方がよい。

タクシーがある島はサンチヤゴ島とサル島、サンビセンテ島だけで、その他の島はアルガールだけである。この島々を連絡する交通機関には飛行機と船がある。

飛行機はすべてプロペラ機で、48人乗りが 1台、24人乗りが 2台、14人乗りが 4台ほどあり、サンチヤゴ島のプライア、サンビセンテ島のミンデレオ、サル島の間は毎日飛んでいる。料金は往復で 3万 5,000円程度である。

一方、船は15～30トンのものが 3～ 4隻あり、貨物中心に週 1回ほど中島の 3島を巡回している。港のない島が 4島あり、船は着岸できず、沖に停船し手こぎボートで荷物、人を着けるので波の高いこの地域では危険である。もちろん、ボートの出せない日は欠航となってしまう。ブラバ島にもこの方法でしか行けなかったが、最近、旧ソ連兵がプライアにきてヘリコプターによる運送業を始めた。ヘリコプターは24人乗りで兵士は20代の若者であるが、ヘリコプターは古く30年以上も昔に製造されたもので危険が大きいと外国人の間で話題になっている。

この国には救助船や救助機はなく、以前に漁船が遭難した場合もセネガルに依頼し、フランス空軍機が捜索したことがあり、この面で問題が多い。

(2) 自家用車を利用する場合

市内 5キロメートルの幹線道路以外は道路には照明がないので、夜間の運転には注意が必要である。また、ヘッドライトの故障した車が走っているので、できる限り夜間は知らない道を通らない方がよい。道路には鶏、ヤギ、牛、豚などが闊歩しているので注意が必要である。動物に対しての事故の場合は、交渉して金銭ですますことができる。原則として道を歩く動物の方が悪いとされるようだが、一概にそういい切れず、お金をとられるので気をつけた方がよい。

対人の場合は問題は大きく、困難である。被害者の仲間からの暴行の有無は不明であるが、そのおそれはあると聞いた。警察、知人に連絡し助言を得て交渉する必要がある。現地の警察高官と日頃仲よくしておくことも、助言を得るうえで必要と思われる。対車事故の場合は、相手と話し合って解決できる。日本より解決は容易だと思う。

なお、1992年から自動車の任意保険会社ができたので、加入をすすめたい。

未舗装の道についてはよくわからないが、休日に四輪駆動車でドライブすると楽しい。なお、ガソリンスタンドは年中無休である。

日本の免許証と同時に国際免許証も持参した方がよい。また、ダカールの日本大使館で、フランス語で日本の免許証である旨の説明と有効期間を入れた証明書を書いてもらい、さらにポルトガル語に訳した書式にして持参すればなおよい。

(3) レンタカーなどを利用する場合

レンタカー会社が 2軒ある。 1軒は車のみ、もう 1軒は運転手付きで、車のみのレンタルはできない。価格は、車のみで 1日 3,000カーボ・ヴェルデ・エスクード（約 6,000円）、運転手付きで 1日 5,000カーボ・ヴェルデ・エスクード（約 1万円）である。

どちらも需要が多く、申し込んでもすぐには借りられない。運転手付きの方が待ち日数が少ない。交渉により長期間借りることも可能である。四輪駆動車はなく、日本製のカローラ、サニー、ブラジル製のフォルクスワーゲン、サンタナが中心である。

(4) 道路地図

社会主義体制の名残りか、地図はない。しかし、石畳の道は簡単なのですぐ

わかる。簡単なものはあるが、実用には問題が多い。その簡単な地図すら入手が困難である。

7-2　交通事故

(1)　対処方法

人身事故でない場合は、相手と話し合いで解決できる。現地の友人、知人に連絡して仲介してもらうとよい。小さな国なので、相手のことはすぐわかる。

人身事故の場合は警察に連絡し、カウンターパート、事務所長、知人、ＪＩＣＡ事務所に連絡する必要がある。

(2)　救急病院

プライア市内に 1軒ある病院がこれに相当する。しかし救急車はない。

(3)　盗　難

1人の場合は打つ手がない。同乗者がいる場合は、盗難防止を同乗者に任せる。

7-3　交通違反

(1)　交通法規

日本と反対で右側通行で優先道路順位があり、信号はない。法規は一般のヨーロッパのものと同様で、道路標識も同一である。

(2)　対処方法

違反した場合は免許証、車両登録証を提示させられ、切符を切られて罰金は警察へ持参し各自で支払う。外国人の場合、よくわからなかったのでといってわびれば、まず大丈夫である。

7-4　車の修理

(1)　部　品

ランプの電気ひとつでさえ入手が困難なくらいである。部品は日本の 2倍以上の高価格である。

(2)　修理工場

オランダのシェル石油の関連工場で、修理がある程度できるようになった。しかし、少し困難な修理は技術者が不在で不可能である。

板金は丁寧で、仕上げもよい。板金工場は市内のマーケットの近くにあり、安価である。（日本の 3分の 1以下）

8. 通　信

8-1 電　話

(1) 一般事情

一般に電話の普及は低く、回線が少ないので申し込んでから回線がくるまで1年は必要である。日本は各島間に回線を無償援助した実績があるので、日本の専門家の場合ルートをつければ比較的早く引ける。

公衆電話は故障していて、ほとんど使えない。

(2) 国内電話

直接通話できる。

(3) 国際電話

直接海外へ通話できる。しかし、国際回線はたいてい込んでいて、日本への通話は困難な場合が多い。

料金は、1分間 1,000円ぐらいで高い。1992年から料金表に通話記録がつくようになった。しかし、機械の故障がときどきあり、記録が出ない時もある。長時間かけると割高になったり、曜日、時間帯によって異なったりするが、それに対する説明はしてもらえないので、料金体系はわからない。

8-2 電　信

(1) テレックス

電報電話局で発信可能である。日本までの最低料金は 3,000円ぐらいである。

(2) ファクシミリ

電報電話局で依頼可能である。しかし、日本まで届くことはないようである。日中の交信が困難なので、勤務時間帯の通信は困難となる。

しかし、電話同様、日本からは比較的簡単に通信できる。夜間、日本との交信は日中より比較的よくなるので、できれば日本から機械を持ち込んで電話線につないで電話とファクシミリの両方を使うようにすればよい。

(3) 電　報

電報電話局から打電できる。

8-3 郵　便

(1) 一般事情

市内に 1軒ある郵便局から手紙、小包を出せる。日本、外国への郵便物は届くが、中身が抜かれることもある。料金は日本まで80円ぐらいである。手紙、小包はすべて局どめである。自分の私書箱は入手困難なので、会社（公社）の私書箱を利用させてもらい自分あての郵便物を引き取る。

書留、小包などは私書箱に入っている通知書とパスポートを持参し、引き取り料を支払って受取る。引き取り料は 200円程度である。日本から送るもので小包にできるものは郵便小包で送った方が通関上簡単に引き取れるので、そうすることをすすめたい。

(2) 課　税

特に情報はない。

9. マスコミ

9-1 新　聞

(1) 主な日刊紙

日刊紙は『大衆の声』ともう 1紙、計 2紙ある。ポルトガル語で書かれている。市内で立ち売りしている子供から、 1部20カーボ・ヴェルデ・エスクード〔40円〕で購入できる。

(2) 本邦日刊紙

日本語の新聞はない。日本からの新聞が、ダイレクトサービス便で 1週間遅れで到着するとのことである。市内のセネガル航空の代理店で取り扱っており、事務所まで引き取りに行く。

(3) 欧米紙

ない。

9-2 ラ ジ オ

(1) ラジオ放送局

放送局はラジオ・カーボ・ヴェルデがあり、ＦＭ放送を行なっている。

(2) ラジオジャパン

7:00と21:00に聴くことができる。朝と夜の周波数は異なるが、イギリス中継になって電波状態はよくなった。通常の短波ラジオで聴取できる。しかし、日によってはまったく聴こえない日もある。

(3) 任国で聴取可能なその他の外国放送

ＢＢＣ、ラジオ・ポルトガル、ドイツ、フランスなどの海外向け放送を夜間聴くことができる。

9-3 テ レ ビ

(1) テレビ放送局

テレビ局は、テレビ・カーボ・ヴェルデ 1局で、カラーでの放送が 19:30～21:30 まである。ポルトガル語による放映であるが、ときには英語の映画があり、23:00 頃まで放映されることがある。

(2) テレビ受信

外国の放送は衛星放送を一部受信できるようである。ただし、アンテナを自分で入手（外国で）し、取り付ける必要がある。現地での機材の購入はできない。

10. 教養、娯楽、趣味、スポーツ

10-1 映画、演劇

(1) 映画館

市内に 1軒ある映画館では週 1回、外国映画（アメリカ映画が中心）を上映する。日本の映画が上映されることはまずない。

(2) 劇 場

ない。国会議事堂のなかにホールがあるので、そこを利用すれば可能であろう。

10-2 出版・書籍

(1) 一般事情

新聞、小冊子の印刷は可能だが、雑誌、書籍の出版はない。

(2) 書 店

市内に書店が 2軒あるが、ポルトガル語の出版物のみで数も少ない。また、1軒は雑貨、文具店を兼営している。

必要な書籍は現地ではまったく入手不可能と考えてほしい。ポルトガル語の辞典（ポルトガル語から英語）はサンビセンテ島のミンデレオで入手できる。

10-3 語学学習

(1) 語学学習施設

市内にある各施設で学習できる。いずれも夜間中心で月謝は 4,000～ 5,000円ぐらいである。

英語――カーボ・ヴェルデ文化センター内で、現地の教師とアメリカ人教師が教えている。

フランス語――フランス文化センターで、フランス人教師が夜間教えている。

ポルトガル語――ポルトガル大使館でポルトガル人教師が教えている。

(2) 家庭教師

自宅で家庭教師による語学学習は可能である。ただし、教師の質に注意する必要がある。すでに述べたようにアフリカ生まれのフランス人、イギリス人、ポルトガル人の場合は、アフリカなまりが強い。月謝は比較的高く、 4万～ 5万円程度である。

10-4 文化活動、文化施設

(1) 一般事情

独立後の年月が短く文化活動の余裕がないため、文化施設、文化活動はたいへん貧弱で、美術、物産などにおいても何もみるべきものはない。文化、衣服などで独自のものは何もないようである。ただ、現地語（クリオール）の歌がアフリカ大陸とは異なるラテン系の流れがあるということで、一部の歌曲の研究家が興味を示すことがある。

(2) 日本・任国友好協会などの有無と活動の内容

何もない。

(3) その他の文化活動、文化施設

フランス、ポルトガルが自国の文化普及に熱心であるが、カーボ・ヴェルデ政府はそこまでの余裕はないようで、何もしていない。

ポルトガル大使館で月に 1回、アメリカ領事館前庭で月に 1～ 2回映画を上映する。どちらもアメリカ映画が中心であり、ポルトガル大使館では無料、アメリカ領事館は有料（ 300円）である。雨は降らないので戸外での映写も問題ない。そのほかにはポルトガル大使館でピアノ演奏を年に 1～ 2回、フランス文化センターでギター、エレクトロギターの音楽会を行なうことがある。

10-5　写真、ビデオ

(1)　写　真

フィルムはASA 100 の35ミリ用のものだけ入手できる。（フジ、コダック）

ただし、価格は高く24枚で 900円、36枚で 1,300円である。

市内に写真店が 1軒あり、最近、日本製の自動ＤＰＥ機（コニカ製）を入れた。このため、翌日仕上げが可能となった。料金は、現像と焼付け（24枚）で 1,300カーボ・ヴェルデ・エスクード（ 2,600円）、焼付けは 1枚90円、現像は 440円となっている。

カメラ部品、機材の入手はできない。

(2)　ビデオセット

ビデオ（テレビ、ステレオ、ラジオなども）は持ち込んだ方がよい。現地でもときどき販売している店があるが、高価格であり、台数も制限されている。

最近、市内の 1軒の店で日本製のソニーのビデオセットを陳列していた。価格は日本での 2倍であった。また、ポルトガルで日本のアイワのビデオセット（台湾製）を購入し持ち込んだポルトガル人がいたが、価格は日本で購入するのと同じ程度であった。外国で購入し、手荷物で持ち込むことは比較的容易である。

プライアには 8軒ほどの貸ビデオ店がある。英語のテープのコピーでポルトガル語の字幕が入っているが、画像はよくない。ＰＡＬ方式で、貸し出し料は 1日 200円から 3日で 300円と店によって少しずつ異なっている。店によっては、最初の貸し出し時に保証金をとる。（ 2,000円ぐらい）

(3)　ミュージックテープ

ミュージックテープは市販されており、ホテルのフロントや文具店で購入できる。カーボ・ヴェルデの歌が中心であるが、テープの種類は少なく20種程度である。価格は、 1本 600カーボ・ヴェルデ・エスクード（ 1,200円）程度である。

クラシック音楽、アフリカ大陸の音楽のテープはほとんど売られていない。

10-6　音楽鑑賞、演奏、民族楽器

(1)　音楽会、コンサート

年に 1回行なわれる音楽祭はアフリカ的な音楽で、ギター、ヤマハのエレキボードを使用したものである。クリオールで歌われる場合が多い。

そのほか、外国からのジャズバンドが年に 1回ぐらいきて演奏する。クラシックのコンサートはほとんど行なわれない。ポルトガル大使館でピアノのコン

サート、フランス文化センターで音楽会が年に 1回程度行なわれる。

(2) コーラス、演奏グループ

コーラス、演奏グループは 5～ 6組あり、週末に各地のディスコ（ 5～ 6ヵ所）で活動している。趣味のコーラス、演奏グループについてはあまり聞かない。

(3) ピアノなど

個人で所有しているといえば、フランス領事夫人である。また、ポルトガル大使館にはグランドピアノがあり、年に 1回本国から演奏家がきてクラシックを演奏する。

(4) レコード

レコードは市販されていない。レコード店もない。

(5) 民族楽器

残念ながら独自の民族楽器はない。アフリカ大陸の楽器の搬入もほとんどなく、教授してくれる人もいない。

(6) その他の楽器

ギターなどがある。

10-7 手芸、絵画、美術工芸

(1) 手　芸

ポルトガルの刺しゅう、レース編みが盛んである。そのほかはあまりない。

(2) 絵画、美術工芸

最近、絵を描く人が出てきて、ときどき展覧会を開くようになってきた。美術、工芸についても同様で、販売していることもある。しかし伝承、民族的なもの、独自のものはなく、ヨーロッパ的なものが中心である。

10-8 趣　　味

(1) 園　芸

水が極度に少ないので、庭にたくさんの木や草花を植えて観賞するのはちょっと気がひける。しかし、日本から花の種を持参して咲かせるとなかなか楽しいし、現地の人にも日本のようすが説明できて楽しみが増える。また、大根やカブの種を持ち込んで植えると野菜不足の足しになってよい。

年中高温なので、水さえ与えておけばたいていの植物は育つと思われる。しかし、園芸に必要な道具類の入手は困難なので、これらの用意は必要である。また、工作機械を多少でも使用するなら、これらの道具も必要である。

(2) 釣　り

海釣りのみであるが、海岸、海底は石、岩だらけなのですぐしかけが岩や石にはさまれてなくなってしまうことが多い。そのうえ、魚やウツボはエサを食うとすぐ岩のなかに入り込みしかけばかりとられてしまうので、たくさん用意する必要がある。この点さえ気にしなければ、釣りはなかなかおもしろい。島の海岸のいたるところで可能であり、ブダイ、サバ、アジ、ウツボなど、たまにはサメも食いつくことがある。

釣り具は入手が困難である。リール、糸、釣り針、竿などを持参する必要が

ある。

10-9 娯楽、遊戯など

(1) 娯楽、遊戯、ゲーム

カジノ、ビリヤードなど何もない。

(2) 芸能興行

特にない。

10-10 スポーツ

(1) ゴルフ

クラブの会員になってプレーできる。クラブでマネジャーに使用する旨を話し、1人 300円支払って車で場所まで行き、途中の村から12〜15歳ぐらいの子供を 3人ほど連れてきてキャディーと車の見張りにする。

ゴルフ場には小屋も木陰もないので、暑い日差しの時は無理である。小石だらけの砂漠で、グリーンはもちろんない。クラブヘッド、アイアンヘッドが石でメチャクチャになるので、捨てるつもりの用具を持参した方がよい。飲み水は常に持参すること。

(2) テニス

ゴルフの場合と同じく、会員になって、1面 1時間 300円で借りられる。ラケット、ボールは入手できないので持参すること。コートとネットはクラブで用意してくれる。ボールボーイを 2人、各 100円で雇って球を拾ってもらう。

テニスは外国人でプレーする人が多いので、4人 1組で申し込んでプレーするとよい。土・日曜日の朝が涼しくてよい。テニスの場合も水を忘れずに持参すること。テニスコートのあるクラブでは午後になると売店が開くので、飲み物を購入することができる。

(3) 水 泳

プライアーマルにプールがあるが、宿泊客しか利用できない。多くの人は近くの海で泳いでいるが、波が高くてすぐ深くなるので、相当の水泳の名手でないと特別なところ以外で泳ぐのは無理である。

(4) その他のスポーツ、用具、ウエア

ウィンドサーフィン、サーフィンが海員クラブで可能である。ただし、用具がないので交渉して借りるか、外国で購入し持ち込むしか手がない。

ジョギングする人は、ジョギングシューズを持参する必要がある。山登りもできるが、暑くて日陰がないのですぐいやになる。

(5) スポーツクラブなど

体育館があり、そこにバレーボール、バスケットボール、サッカー、卓球、重量挙げ、空手などのクラブがあって加入できる。

10-11 風俗営業

特にない。スナック、レストラン、ホテルのバーが利用できる。ディスコが 5〜 6ヵ所あり、0:30頃〜4:00までが盛りあがりの時間である。入場料は 300カーボ・ヴェルデ・エスクード（約 600円）で、飲み物は各自で購入する。

ときどきヨーロッパからヨットがやってきて停泊することがあるが、麻薬を

持ち込むことがあると聞く。彼らはここで荷物を渡してアメリカなどへ持ち込む方法をとると聞いたが、最近は取締りが厳しくてできなくなったようである。

10-12 子供の遊び

たこあげ、車輪回し、プチサッカー、バスケットボールなどがある。動物園、遊園地などの施設はないが、なんの加工もされていない自然がある。

11. その他のサービス

11-1 美 容 院

市内に 4～ 5軒ある。パーマが 5,000円ぐらいで、現地の人件費や収入からみると相当高い。ポルトガルで修業し戻ってきた人が開いている。

11-2 理 髪 店

市内には20軒以上の理髪店がある。ひげ剃りは行なうが、洗髪はしない。値段はひげ剃りを含めて 300円である。ヨーロッパ人は美容院で洗髪・調髪をする人が多い。価格は 900円ぐらいである。

11-3 日本より持参した方がよい美容・理髪用品

クシ、ハサミ、ブラシの類いで日常使っている用具、および調髪剤、ムース、化粧品、リキッド調髪剤などは入手できないので持参すること。また、オーデコロン、香水はないので必要な人は持参する。

12. 観　光

12-1 地方旅行上の留意点

地方の島へ行く場合、物資が特に欠乏しており食肉類、バター、チーズ、野菜などの食料品の入手も困難な場合が多い。土産として持参すれば重宝がられる。また、防虫スプレー（蚊対策）、薬品なども忘れずに持参すること。寝袋、自炊用具の携行は必要ない。

14人乗りのセスナ機にたくさんの手荷物を持ち込む人が多いので、重量オーバーで荷物が減らされることがある。

12-2 主要観光地・保養地ガイド

サンチヤゴ島――旅行代理店（プライアートール）で 1日コース（8:00～16:00 頃まで）を扱っている。マイクロバスで10人ぐらいのパックであり、1人 5,500カーボ・ヴェルデ・エスクード（ 1万 1,000円）ぐらいで昼食付きである。ポルトガル語以外に英語とフランス語のできるガイドがつく。

サンビセンテ島――狭い島なのでホテルのフロントで交渉してガイドを雇うか、あるいはタクシーを雇って案内してもらう。タクシーは 1日 5,000カーボ・ヴェルデ・エスクード程度（ 1万円程度）である。

サントアンタン島――空港近くにある町ポルトノブに旅行会社があり、ここで車を雇って案内してもらうとよい。価格はいちおう 1日 5,500カーボ・ヴェルデ・エスクード（ 1万 1,000円）ぐらいと定まっているが、はじめに交渉して決めた方がよい。

フオゴ島、マイヨ島、ブラバ島、ボアビスタ島――これらの島にはタクシーはない。すべて個人所有のトラック、ボックスカーのみである。それぞれ交渉して案内してもらう必要がある。価格は 1日 1万円ぐらいである。

フオゴ島は火山島で、今でも頂上付近からかすかに煙が出ている。ボアビスタ島は白砂の海浜が36キロメートルも連なっており、人影がまったく見当たらない。いずれの島も自然に対し人の手がまったく加えられていない。非常に不便である。

12-3 旅　行

(1) 自動車

人の住んでいる島が 9島あり、人口の半数が面積が最大のサンチヤゴ島に集中している。自動車もまたこの島に集中している。サンチヤゴ島ではレンタカーも利用可能である。車道も比較的整備されている。

(2) バ　ス

バスでの旅行はない。

(3) 鉄　道

ない。

(4) 航空機

9つの島を結ぶ交通機関は航空機だけである。ブラバ島にはセスナ機も運航していなかったが、最近、旧ソ連のヘリコプター（24人乗り）が就航した。

国内の航空運賃は往復で 1万 5,000～ 3万 5,000円程度（近くの島間と遠い

島）である。

12-4　エージェント

　プライアートール（電話　614017～ 8）のオーナーはアメリカ帰りで、日本の旅行代理店同様、航空券の確認もかわりに行なってくれるので便利である。もう 1社あるが、こちらはサービスがよくない。

12-5　ホテルなど宿泊施設の手配

13. 治安、緊急時の心得

13-1 暴動、クーデターなど

(1) 緊急時の連絡

何もない。ファクシミリを利用して東京、ダカールに連絡することが考えられるが、回線がつながらないことが多い。貧しいうえに資源的にも恵まれていない国なので平穏な時が多いが、 5年に 1度の総選挙があり、この時が問題と思われる。この時期（ 1月中旬）には名目をつけて国外へ出ておくことを考えた方がよいかもしれない。

13-2 強盗、盗難

(1) 一般的治安状況

アフリカの国のなかでは治安は良好である。これは、島国で狭いうえに出口も入口も限られているのも一因と思う。といっても貧しい人々が多いので、盗難や泥棒も多い。夜間の外出、ましてひとり歩きは避けるのがよいことはいうまでもない。

(2) 防犯対策

最近続いた強盗事件は、犯人一味が捕まって一段落した。これまではこのようなピストルを持って殺人まで行なった盗難事件は少なかったが、今後についてはわからない。特に留守の間の盗難は多いので、対策が必要である。一戸建てを避け、アパートに住み、ガードマンを雇い、外扉の鍵と自宅扉の鍵、窓の鉄格子の設置などの対策が必要である。

(3) 被害時の心得

犯人に遭遇したら、まず逃げ出す。逃げ切れない時は騒がずになんでもくれてやるといってじっとしていること。

ＪＩＣＡ事務所に報告し、いちおう警察にも連絡する。友人と相談し、侵入路の防止策を実行する。警察に調べてもらっても役には立たないし、場合によっては内情を知られて逆効果のこともある。（手引きされるかもしれない）

13-3 火災、風水害、地震

(1) 一般的災害発生状況

人災である火災は別として、風水害、地震はこれまで起きていない。もし地震、風水害が起きたら、なんの対策も立てていないので大被害を被ることと思う。家は石とブロックづくりで鉄筋は入っていないので、大惨事になると思われる。

(2) 防災対策

(3) 被災時の心得

14. 出入国手続および帰国手続

14-1 入 国 時

(1) 空港施設概要

1993年夏に改造の予定であるが、これまでは仕切り扉が 1ヵ所あるのみで田舎の分校の校舎と同じようなものであった。飛行場も舗装されていない。

(2) 入国手続書類

入国カードに記入する。

(3) 入国審査

入国カードとパスポートを提示する。ビザがないと入国できない。

(4) 税関検査

特に検査はない。

(5) 空港内での留意点

(6) 空港からのトランスポーテーション

空港から目的地までの交通はタクシーのみで、市内まで約 5分、料金は 200カーボ・ヴェルデ・エスクード（ 400円）である。タクシーはメーターがないので、値段を交渉してから乗ること。

(7) その他の留意点

ホテルの支払いは外貨（ドル）またはトラベラーズチェックでもできる。ただし、外国人専用の 3軒のホテル（プライアーマル、マリソール、フェリシダーデ）のみである。

いったん交換した外貨は再交換できないので（非常に手間と日数が必要）、この点は気をつけてほしい。

14-2 出 国 時

(1) 出国時の概要

プライアからセネガルのダカールへ出てパリを通って成田へ行く方法と、プライアからサル島の国際空港まで行き、そこからポルトガルのリスボンへ出てパリまたはロンドンを経て成田へ帰る方法とがある。ダカール経由の方法は、ダカールの空港官吏がわいろを要求したり、文句をつけて金品を要求したりするケースがあるので（特に日本人に）、サル島を経てリスボン経由、成田をすすめたい。

(2) 出国手続上の留意点

あらかじめ滞在予定期間中のマルチプルビザを取得してあれば、再入国ビザは必要ない。

14-3 帰国手続

(1) 帰国時に必要な事務手続

特に必要としない。

(2) 車の処分

免税で購入した車の売却先としては、専門家、外交団など免税特権を有する人が望ましい。免税特権のない人へ売却すると、買い手が税金を支払うことになるので、税金額設定のため輸入時のインボイスなど通関関係書類が必要とな

る。

(3) 家財道具の処分

口コミで知人に連絡して処分する。家財道具は少ないので、引き取り手は多い。

(4) 住宅の明け渡し

口頭、あるいは文書による当初の契約どおりにする。

(5) 銀行口座の閉鎖

15. 私財の輸送、引き取り、購入

15-1 家財道具

(1) 輸送業者

国外への輸送は輸送業者に依頼できる。

これまでは自分ですべて荷づくりして航空会社へ出向きアナカン手続をしていたが、最近ポルトガルの輸送業者が開業し、日本まで保険付きで送ってくれるようになった。

国内は自分でアルガールと交渉して引き取る。または輸送業者の事務所まで持ち込んで手続をする。

(2) 輸入手続

通関書類一式（B/L 、インボイス、パッキングリスト）を通関士に渡し、協力省に写しを持参して免税申請書をもらい、関税局の承認を受けて引き取りを行なう。

(3) 家財道具の購入

15-2 自 動 車

(1) 一般状況

専門家は免税で自動車を輸入できる特権を付与されている。

輸入規制は何もないが、排気量によって年間の税金が異なる。また、一般人に売却する場合、年式の古いものほど買い手の支払う税率が高くなる。（新車は40%、 4年経過後までは60%、 8年後までは80%、10年までは 100%、10年以降は 120%） 200万円の新車は80万円、10年経過の 100万円の車は 120万円の税金を購入時に支払うため、新車で 280万円、10年の古物で 220万円の価格となってしまう。できる限り新式の車を輸入したいのが政府の意向である。

車の価格は現地では日本の 2倍程度である。現地での車の購入は高価格のうえ、入手まで長期間かかるのですすめられない。

(2) 輸入手続

新車、中古車とも日本より輸入する場合、必要な書類、B/L など通関書類一式を揃えて協力省より免税許可をもらい、通関士に依頼し通関する。 1～ 2週間で免税措置がとれ通関できる。引き取りは個人で行なう。

(3) 任国での購入

専門家、大使館員など免税特権者から購入する方法と、現地の人からすでに輸入税を支払った車を購入する方法とがある。後者の場合は名義書き替えだけである。販売税の類いはない。

(4) 自動車登録

警察へ出向いて登録し、 3ヵ月ごとに保険金額（排気量によって異なる）を支払い、ステッカーをもらって窓に張っておく。

年に 1回、登録税を支払いステッカーをもらい窓に張っておく。このステッカーがないと街で警官に止められて、 5,000円ぐらいの罰金をとられる。

(5) 免許証取得

書き替えについては聞いていないが、日本の免許証と国際免許証で問題はな

い。

(6) 保険、税金

自動車保険の会社が 1社できたが、加入者は少ない。対物、対人、盗難に有効とのことである。

車両税は排気量によって異なる。 2,000cc以上で年間 4万円ぐらいである。

16. 社　交

16-1 風俗習慣

ポルトガルの植民地で 500年ぐらいの歴史（1462年に無人島として発見された）しかないので、独自の風俗習慣はない。すべてにポルトガルの習慣が入っている。

16-2 パーティでの留意点

特にない。ヨーロッパというよりポルトガルの様式が多い。フランスのような洗練されたマナーは少なく、気楽にしていられる。

16-3 来客時の留意点

16-4 訪問時の留意点

すべての様式が擬似ヨーロッパ式であるので、あまり気をつける必要はない。

16-5 禁止されている言動

特にない。

17. 任国官公庁

各官庁とも執務時間は 8:30～18:30、昼休みは12:30～14:30である。土・日曜日、祝祭日は休みである。

18. 在外日本関係機関など
ない。

19. 地方都市

任国情報をご利用の皆様へ

この任国情報は、国際協力のために赴任されるＪＩＣＡ長期派遣専門家、ＪＩＣＡ職員等の方々に、任国での生活上必要な最新の情報を提供する目的で作成されました。

本書の原データは国際協力総合研修所内のデータベースに蓄積されており、新しいデータが入手され次第、逐次更新できるシステムにしております。

現在までに、下記の国々について任国情報が整備されております。

なお、政府技術協力のために赴任するＪＩＣＡ役職員および派遣専門家は、技術協力協定や要請文書などの外交関係により、任国への入国および滞在にあたって特別の条件が付され、一定の義務が免除されるなどの特権が付与されています。本情報はこれらの条件に基づいた赴任マニュアルです。したがってご利用はＪＩＣＡの用務による業務渡航者に限らせていただいております。

また、本情報は外国人専門家という特殊なステイタスによる生活ガイドであって、それぞれの国の人々の一般的な暮らしぶりを紹介するものではありません。各国の一般的な各種事情については、ＪＩＣＡ図書館に多数資料をそろえておりますので合わせてご利用ください。

―――― アジア地域 ――――

1. バングラディシュ
2. ブータン
3. ブルネイ
4. カンボディア
5. 中華人民共和国
6. インド
7. インドネシア（ｼﾞｬｶﾙﾀ、ﾊﾞﾝﾄﾞﾝ、ｼﾞｮｸﾞｼﾞｬｶﾙﾀ、ﾒﾀﾞﾝ）
8. 大韓民国
9. ラオス
10. マレイシア
11. ミャンマー
12. ネパール
13. パキスタン
14. フィリピン
15. シンガポール
16. スリ・ランカ
17. タイ（ﾊﾞﾝｺｸ、ﾁｪﾝﾏｲ、ｺﾝｹﾝ）
18. ヴィエトナム

―――― 中近東地域 ――――

1. アルジェリア
2. バハレーン
3. エジプト
4. ジョルダン
5. クウェイト
6. モロッコ
7. オマーン
8. カタル
9. サウディ・アラビア
10. スーダン
11. シリア
12. テュニジア
13. トルコ（ｱﾝｶﾗ、ｲｽﾀﾝﾌﾞｰﾙ）
14. アラブ首長国連邦（ﾄﾞﾊﾞｲ）
15. イエメン（ｻﾅｱ）

―――― 太平洋地域 ――――

1. フィジー
2. キリバス
3. ミクロネシア
4. パラオ
5. パプア・ニューギニア
6. ソロモン諸島
7. ヴァヌアツ
8. 西サモア

―――― 欧州地域 ――――

1. カザフスタン
2. キルギスタン
3. ポーランド
4. タジキスタン
5. トルクメニスタン
6. ウズベキスタン

―――― アフリカ地域 ――――

1. ベナン
2. ブルンディ
3. カメルーン
4. カーボ・ヴェルデ
5. コモロ
6. エティオピア
7. ガンビア
8. ガーナ
9. ギニア
10. コートジボアール
11. ケニア
12. リベリア
13. マダガスカル（ｱﾝﾀﾅﾅﾘﾎﾞ、ﾃﾞｨｴｺﾞ・ｽｱﾚｽ）
14. マラウイ
15. モーリシャス
16. モザンビーク
17. ニジェール
18. ナイジェリア
19. ルワンダ
20. サントメ・プリンシペ
21. セネガル
22. セイシェル
23. ソマリア
24. タンザニア（ﾀﾞﾙｴｽｻﾗｰﾑ、ｻﾞﾝｼﾞﾊﾞﾙ）
25. トーゴー
26. ザイール
27. ザンビア
28. ジンバブエ

―――― 中南米地域 ――――

1. アルゼンティン
2. ボリヴィア（ﾗ・ﾊﾟｽ、ｻﾝﾀｸﾙｽ）
3. ブラジル（ﾌﾞﾗｼﾞﾘｱ、ｻﾝﾊﾟｳﾛ、ﾘｵﾃﾞｼｬﾈｲﾛ、ﾚｼﾌｪ、ﾎﾙﾄｱﾚｸﾞﾚ、ﾍﾞﾚｰﾝ）
4. チリ
5. コロンビア
6. コスタ・リカ
7. ドミニカ共和国
8. エクアドル
9. グレナダ
10. グァテマラ
11. ホンデュラス
12. メキシコ
13. パナマ
14. パラグァイ（ｱｽﾝｼｵﾝ、ｴﾝｶﾙﾅｼｵﾝ）
15. ペルー
16. セント・ルシア
17. トリニダッド・トバゴ
18. ウルグァイ
19. ヴェネズエラ

任国情報コメント用紙

本書をより使い易いものとするために、皆様からの貴重なご意見（説明不足、間違い、誤字、脱字、ご要望など）をお待ちいたしております。ご記入に際しましては、任国情報に関することのみ具体的にご指摘くださるようお願いいたします。

［送付先］　〒162　東京都新宿区市谷本村町10-5
国際協力事業団国際協力総合研修所
技術情報課　任国情報係

国　名		年　度	年版

氏　名		年　齢	歳	性別	男・女

利用区分	所属(担当)部課名	指導科目	派　遣　期　間
JICA役職員			
JICA専門家等			
その他		(所属先)	(当該国での滞在期間)
住　所			
電話番号		日　付	年　月　日

ページ	行	内　　容

国　総　研　記　入　欄					
記事		技術情報課確認印			
		データベース修正処理	課　長	代　理	担　当
		月　日	月　日	月　日	月　日

「任国情報（カーボ・ヴェルデ）１９９４年版」
平成６年２月　１日発行
編集・発行所　国際協力事業団　国際協力総合研修所
〒162 東京都新宿区市谷本村町10番５号
電話（03)3269-2357
編集協力　財団法人　日本国際協力センター